学力向上実践研究
研究報告書

「確かな学力の育成に向けて」

平成 24 年３月

奈　良　県　教　育　委　員　会

学力向上実践研究推進協議会

ー 目　次 ー

1　確かな学力の育成のために

「学ぶ意欲を高め学力の向上を図る」　…1
学力向上実践研究推進協議会会長
奈良教育大学　教授　重松　敬一

2　学力向上実践研究の概要

学力向上実践研究推進事業概要　…8

3　学力向上実践研究　推進地区の取組内容

・御所市教育委員会　…11
・生駒市教育委員会　…13
・田原本町教育委員会　…17

4　学力向上実践研究　推進校の取組内容

・「わかる授業からわかり合う授業へ」　御所市立名柄小学校　…21

・「伝え合い、学び合う力を高めよう！」　御所市立大正小学校　…24
～子どもの学びをつなげる・広める・深める～

・「自ら考え、仲間とともに深め合う子どもをめざして」　生駒市立生駒南第二小学校　…30
～算数科を中心として基礎基本を定着させる指導の在り方の研究～

・「書く力を高める授業の研究」　田原本町立北小学校　…36

5　学力向上実践研究推進協議会委員名簿

平成23年度学力向上実践研究推進協議会委員名簿　…39

学ぶ意欲を高め学力の向上を図る

奈良教育大学　重松　敬一

１．はじめに

平成23年度には全国学力・学習状況調査も第５回を迎えるところであったが、東日本大震災の影響で、全国規模での実施は見送られた。奈良県では、児童生徒の学習状況等が引き続き調査された。結果の概要は別に報告されるので詳細は避けるが、主なものは次のようであった。

「国語、算数・数学の勉強は好きですか」という質問について、肯定的に答えた児童生徒の割合は、小学校の算数で昨年度より増加したものの、それ以外は昨年度を下回っていた。

このような結果を踏まえて、授業改善や学力向上への取組を真摯に行い、子どもたちに学ぶ喜びをもたらす努力をすることが引き続き大切とされた。

実際、奈良県の子どもたちの学びの実態をしっかり押さえ、今後の奈良県での学習指導改善のための質的な課題を踏まえ、奈良県で学ぶよさを実感してもらえるような学習指導環境を実現することが一層望まれているように思う。

そこで、質的な学習指導環境の改善を図るための手がかりを、子どもの学習意欲の向上ということに焦点を置きながら引き続き考えてみたい。

特に、今年度は、「学力向上実践研究推進協議会」で組織的な検討を行ってきた。具体的な課題は、四つの実践推進校（御所市立名柄小学校、御所市立大正小学校、生駒市立生駒南第二小学校、田原本町立北小学校）を設けて、実践的検討を行った。

２．昨年までの提案を振り返る

(1) 奈良県の現状について

奈良県の現状では、この４年間でほぼ変わらない課題がある。

① 表現の仕方に注意して読み、内容について理解することに課題がある。
② 日常的な事象について、筋道を立てて考え、数学的に表現することに課題がある。
③ 学習は大切だと思っている児童生徒の割合に比べて、学習が好きだと思っている児童生徒の割合が低い。
④ 学校のきまりを守っている児童生徒の割合が低いなど、規範意識に課題がある。
⑤ 全国学力・学習状況調査の調査結果が、学校の取組に十分に生かされていない。

(2) 学ぶ意欲を高めるための学習指導について

まず、基礎基本ができていないからといって練習だけを繰り返すのでなく、「無理や」「できないわ」といった否定的な気持ちから「ちょっとやってみるわ」と思わせることが大切になる。その後、以下に示す三つの学力層に応じた学習指導を考える必要がある。

Ａ層：学習習慣の定着や習得が中心の学びの層
Ｂ層：自分なりの学びの方法を知ることが必要な層

Ｃ層：自分なりに学びのチャレンジができる層

Ａ層では小さな納得の連続、Ｂ層では大きな納得の学び、Ｃ層ではチャレンジのある学びが大切となる。

(3) 特定の学力層内だけの学習指導ではなく、連続的でより上位の発展的な層への学力向上を意識することについて

三つの層は、決して固定的なものではなく、それぞれの段階での学習指導の充実とともに、さらに発展的な学力層を意識した図１のような学習指導の工夫が大切である。

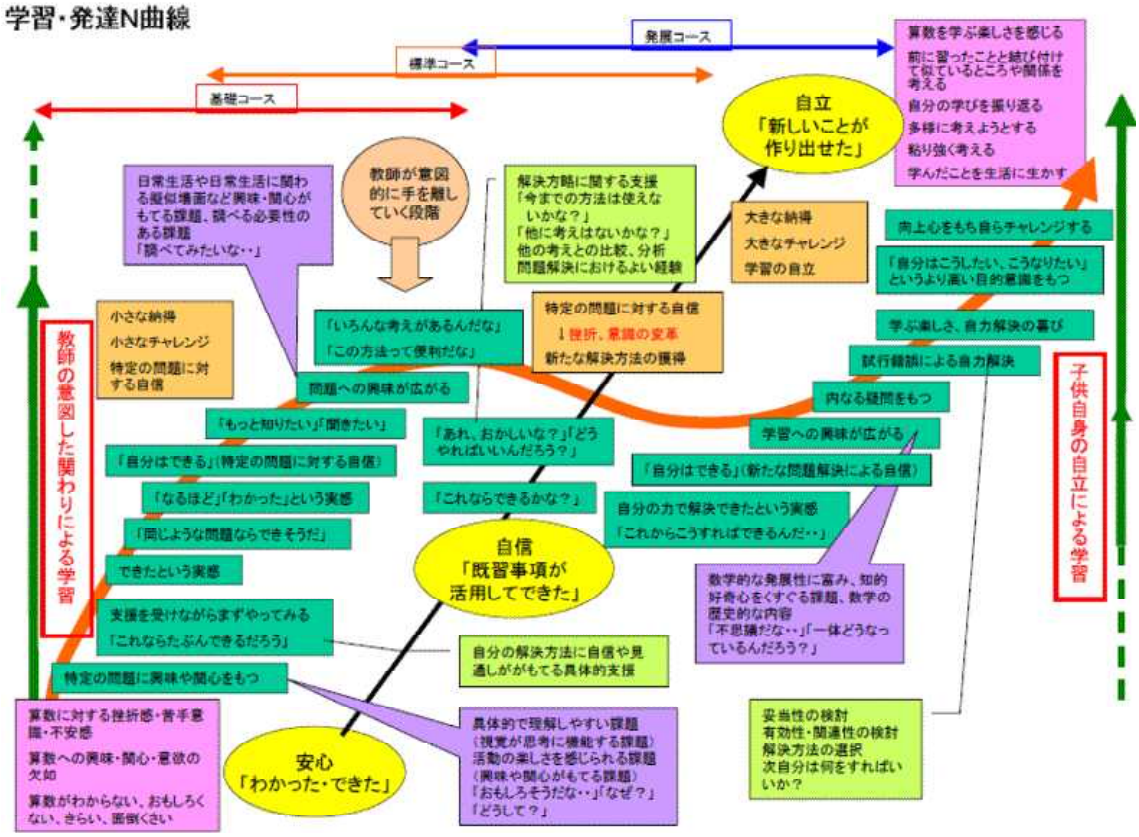


図１　学習・発達Ｎ曲線

(4) 学力向上を促すもう一人の自分（メタ認知）の育成を図ることについて

学力向上には教員の積極的な指導も大切であるが、むしろ、子ども自らが学びの意欲をもつためには、自分の知的活動（認知）ともう一人の自分（メタ認知）の連携による学びのプロセスの育成が大切である。例えば、「私は友達の考えを聞くとわかりやすい。」（学習の方略に関するメタ認知的知識）と意識している子どもには、学び合いの場面を積極的に設定することが必要である。

(5) 平成19年度と平成22年度との比較など、今後とも経年的な変化に注目することについて

昨年度の中学校調査は、平成19年度小学校調査を受けた児童が調査の対象であったことから、その結果を踏まえた問題が出題されたところ、中学校国語で「話し方の工夫をとらえることが引き続き課題」、中学校数学で「円の面積を求める際に円周の長さなどと混同している生徒が同程度いるという課題」が見られたという。中には小学校から引き続き課題が見られたものもあり、小・中学校を通じた継続的な指導が必要となろう。

(6) 学習指導の改善の検討では、具体的な事例にも着目することについて

昨年度は、学校での組織的な取組、さらには、教科の視点からの取組（小学校国語科、算数科）の視点からの学習指導の改善の検討が行われた。過去３年間の巨視的な取組に対して、昨年度は焦点化した微視的な取組の検討が行われたともいえる。

例えば、算数の割合の指導事例を踏まえて提言された指導改善は次のとおりであった。

〇学習の系統を理解する
〇数量についての子どもの感覚を豊かにする
〇テープ図を使っての構造的な関係を考えさせる
〇自分の考えを説明させる
〇日常などでの活用との関係の理解を図る
〇結果に至る子どもの学習プロセスを解答類型を参考に考えてみる

(7) 指導の課題解決に必要な情報を得るための行動について

学校、学級、教科等の指導の課題の解決になお必要な情報を得るために、次のような方法も考えられる。

・一人で書籍・雑誌などを読む
・ネットにアクセスして一人でe-learningをする
・一人で通信教育を受ける
・学校現場を離れて、長期間、大学等で勉強する
・他の教員の公開授業や研究発表会に参加する
・学会や研究会に参加する
・教育委員会や教育センターなどの講座に出席する
・大学などで行われる公開講座に参加する
・科学博物館や科学館の展示物を見に行く
・他の教員と本を読んだりして共同で研修する
・他の教員や一般の人などとネットを利用して研修する

３．今年度の課題と対策

(1) 今年度の課題

今年度の学力向上実践研究推進協議会では、学びへの意欲を高める授業を中心に考えてきた。段階的に言えば、次のような課題が考えられた。

・市町村教育委員会などの地域でのネットワークとしての支え合う取組がまず必要となる。
・その上に立って、個々の学校が、それぞれ置かれている状況の違いを踏まえて、管理職の強いリーダーシップの基に組織的な取組が求められる。
・そして、それぞれの教職員の改善への提案を基にして、児童生徒が学びたくなるような学習意欲を引き出す方策をどれほど多くできるかが問われてくる。
・もちろん、その方策がうまく機能するためには、家庭や地域の支持が必要であることは言うまでもない。

(2) 今年度の課題への取組のポイント

課題を解決するために、次のようなプロセスが必要となる。

・現状の地域や学校の課題や解決の方向性の意識を共有化する
・課題の改善のための新たな枠組みを検討する
・そして、改善の工夫を実践する
・改善の実感を感じる
・改善の取組が習慣となる

例えば、平成19年の大阪府教育センターの学習意欲を高める授業の展開では、次のような枠組みが示されている。

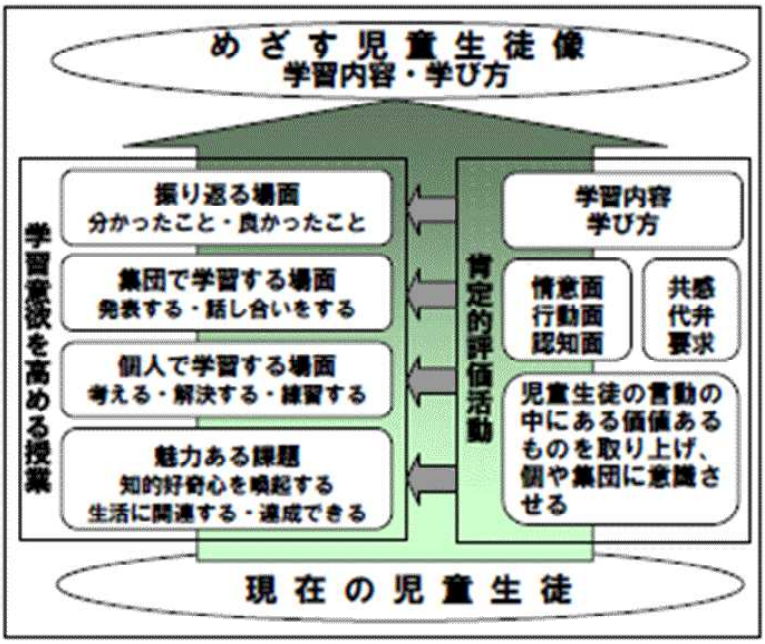


図２　「学ぶ意欲」を高める授業モデル

これをもう少し具体的な展開として提案されたものが、昨年度の奈良教育大学の棚橋教授による学習改善のプロセスに見ることができる。

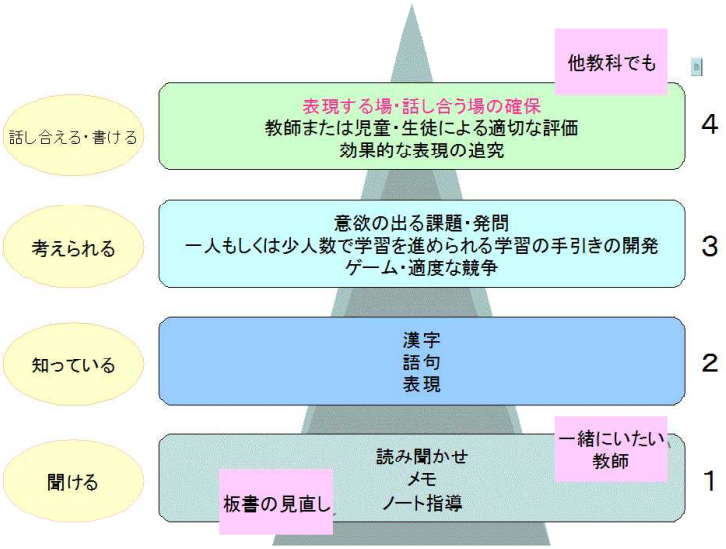


図３　国語などの学習ステップ

ここでは、国語を基本にして、学習の意欲を引き出すための授業の工夫の展開が具体的に示されている。

このような具体的な日々の授業での取組を参考に授業の改善を図りたい。

もちろん、個々の授業を学年ごとの微視的な視点で見るだけでなく、６年間や９年間の巨視的な系統的な視点で枠組みを考える必要がある。例えば、今年の提案では、田原本町立北小学校にみる６年間の＜書く力の育成＞の枠組みが参考になろう。

5. 到達目標とつけたい力

	学年	到達目標	つけたい力
低学年	1	順序を整理して、簡単な構成を考えて文章が書ける。	時間の経過に沿って経験したことを書くことができる。
	2		経験したことを整理し、簡単な構成を考えて書くことができる。
中学年	3	相手や目的を意識し、段落相互の関係に注意して文章が書ける。	段落のまとまりを意識して書くことができる。
	4		適切な接続詞を使い、段落と段落の続き方を考えて書くことができる。
高学年	5	相手や目的を意識し、文章全体の構成を考えて文章が書ける。	・段落をはっきりさせ、段落相互の関係が分かるように構成を考えることができる。 ・事象と感想、意見についてふさわしい書き方をすることができる。
	6		・目的や意図を考えて、語句の選び方などを考えて書くことができる。 ・表現の効果を工夫して書くことができる。

図４　田原本町立北小学校の事例

このような６年間の展望があり、それぞれの取組の項目での具体的な実践事例も参考になる。もちろん、この６年間の計画が全ての学校に合うとは限らない。それが、すでに述べた個々の学校の置かれている状況の違いであるといえる。

それぞれの状況は、三つの層の段階的な改善のステップを意識して、より高位の学力向上を図ることが大切になる。

この点で、今一度、やはり昨年度の奈良県学力向上フォーラムで提案された奈良教育大学教職大学院の小柳教授のモデルを参考にして、学校としての改善の取組を図りたい。

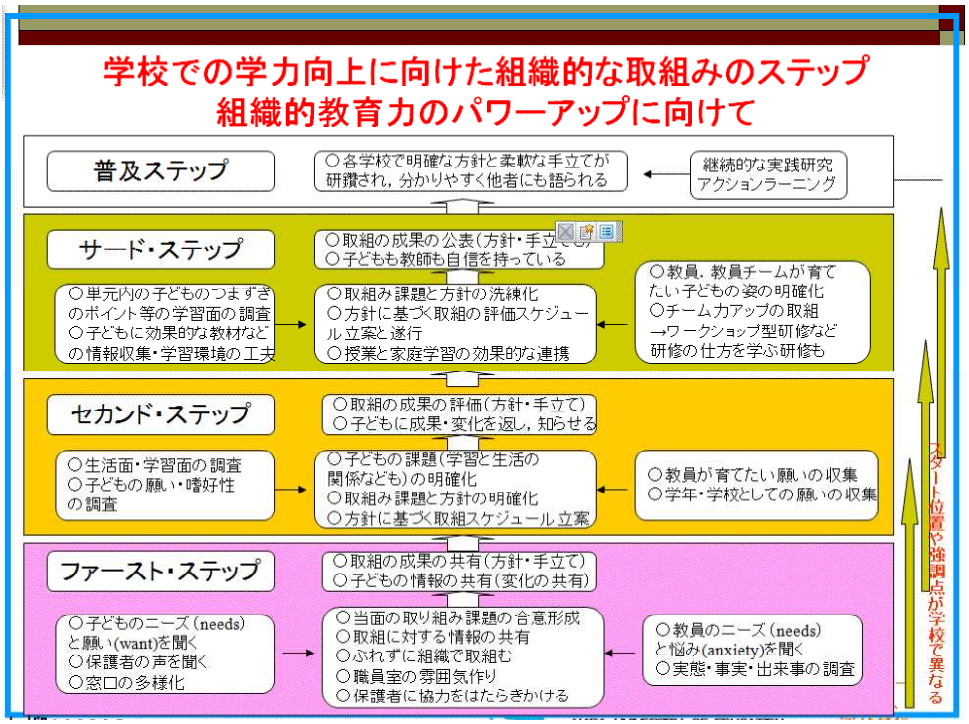


図５　学校での学力向上に向けた組織的な取組のステップ

このモデルの一部を具体的な実践の枠組みで示したのが名柄小学校の事例といえる。

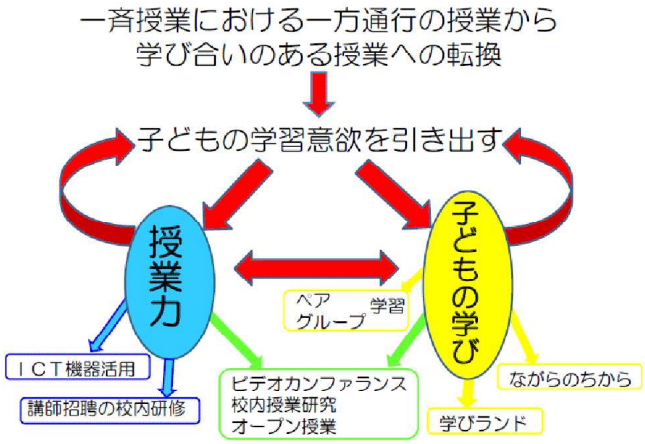


図６　御所市立名柄小学校での組織的な取組の枠組み

それぞれの取組についての解説は別の報告に譲るが、学校としての改善の取組として是非参考にしてほしい。

４．おわりに

今年度の学力向上実践研究推進協議会の取組を今一度まとめてみると、次のようになろう。

○地域としての取組がまず必要である。

例　資料の共有、補充指導のプログラムの開発

○それぞれの学校にふさわしい取組と改善を行う。

改善を実践してから評価を考え、さらなる改善を図るのではなく、実践をする前に、あらかじめ評価と改善の枠組みを策定する。

例　付けたい力の学年達成表の開発

○個々の授業の改善を図る。

例　他者意識を育てるためのICT利用、小黒板利用、修正可能なファイルの工夫
児童生徒の思考のプロセスの共有化の工夫

○教員の適切なアドバイスを工夫する。

○若手教員へのサポートを積極的に図る。

これを授業実践に限って考えてみて、次のような指標を基にした授業改善から始めてみてはどうだろうか。

授業中に以下のような取組を常に意識し、少なくとも学期に一度、アンケートや児童生徒のノートのチェック等で、授業の改善に対する子どもの実感を聴いてみる。

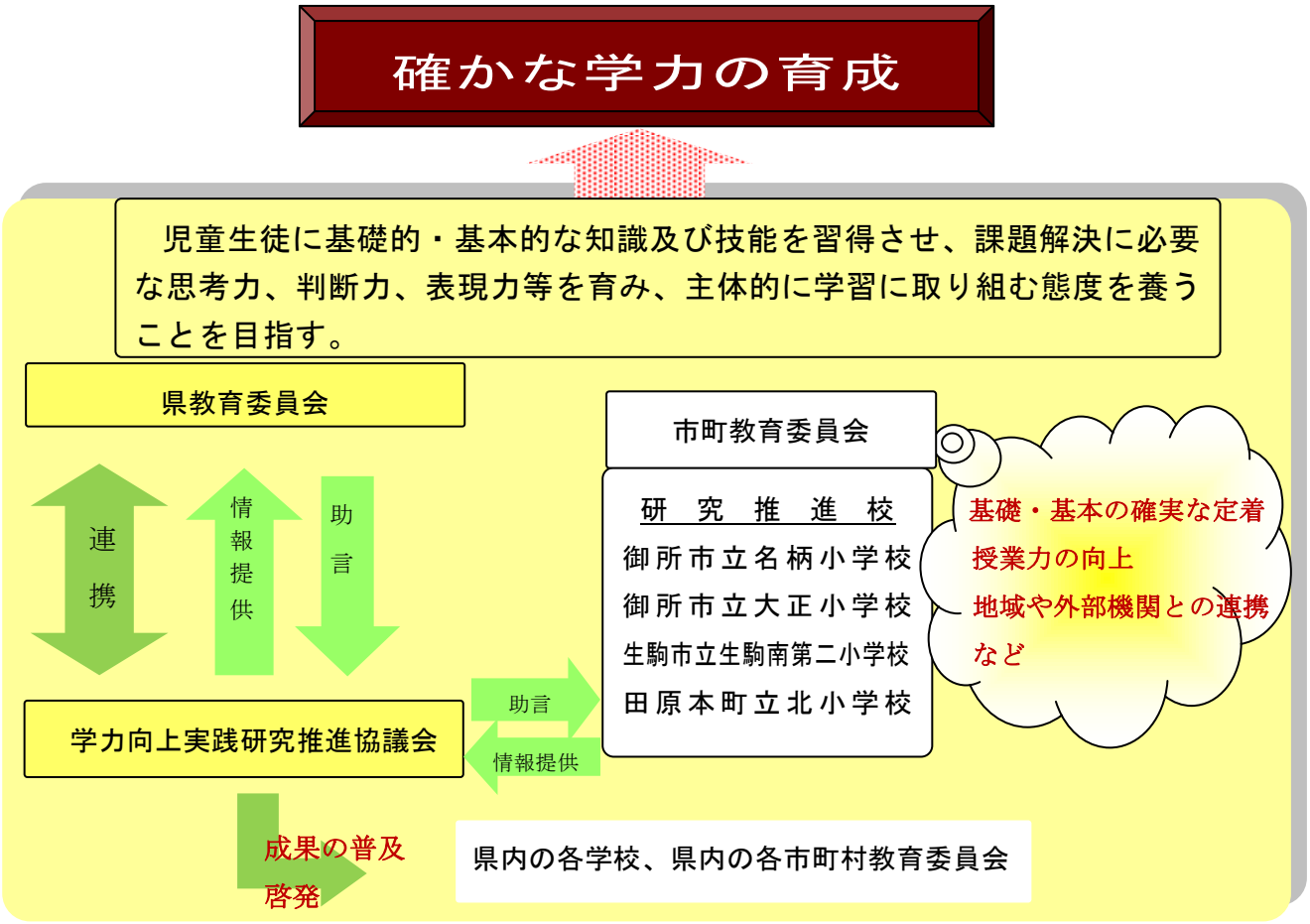
① 普段の授業で、児童生徒が自分の考えを発表する機会がよくあるか

② 普段の授業で、児童生徒が学級の友達との間で話し合う活動がよくあるか

③ 普段の授業で、児童生徒が自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることがよくあるか

このようにして、「どうしたら問題が解けるか」だけの指導から、「どうしたら楽しく問題を解くようになるか」への＜学びへの意欲を喚起する＞授業改善を図ってみたい。

学力向上実践研究推進事業概要



事業趣旨

新学習指導要領の円滑な実施に向け、教育委員会、学校が連携・協力し、地域の実情や課題を踏まえ、児童生徒に基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うための実践研究を推進する必要がある。

本事業はこうした実践研究を推進するため、「学力向上実践研究推進協議会」のもと、学力向上実践研究推進校として４校を指定し実践研究を進めるとともに、その研究成果の普及を図る。

事業の内容

県教育委員会は、「学力向上実践研究推進協議会」を設置し、推進地域や学力向上実践研究推進校の実情や課題に応じて、学校における学力向上のための具体的な手立てや、地域や家庭と連携して取り組む児童生徒の学習意欲の向上や学習習慣の確立のための方策等について研究協議を行い、学力向上実践研究推進校及び市町教育委員会と共同で取り組む実践研究を実施する。

「学力向上実践研究推進協議会」は、県教育委員会、学校、学識経験者より構成し、実践研究の総括及び成果の普及を行う。

委託期間

平成 23 年６月 28 日～平成 24 年３月 30 日

学力向上実践研究の概要

１．研究推進校、推進地域の課題

学力

・基礎学力が定着していない。
・指導方法の工夫が見られない。
・基礎的・基本的な知識・技能を活用する授業が十分でない。
・教員の研修機会を充実すること。

など

生活

・学習規律が不十分である。
・基本的生活習慣が確立されていない。
・学び合える集団に高まっていない。
・自分に自信がもてない児童生徒が多い。

など

家庭・地域

・家庭学習が不十分である。
・家庭での過ごし方に課題がある。
・地域や外部機関との連携が十分でない。
・地域への学校の取組を発信すること。

など

２．課題に即した具体的な取組

県教育委員会

学力向上実践研究推進協議会の設置	○各研究推進校の取組への支援 ○各研究推進校の実践研究の成果等の検証 ○各研究推進校の実践研究の成果を普及する方法の検討
教育課程研究集会の実施	○小学校教育課程研究集会の開催 ○中学校教育課程研究集会の開催
実践研究の実施	○研究推進校への指導主事派遣 ○授業研究等実践研究の推進
研究発表会（授業公開及び講演会）の実施	○授業公開 ○研究発表 ○「算数的活動と授業改善」をテーマとした講演会
奈良県学力向上フォーラムの開催	○研究推進校による研究発表 ○ＩＣＴ活用の在り方についての実践報告 ○「学びへの意欲を高める授業を考える」をテーマにしたシンポジウム
実践研究成果の普及	○確かな学力の育成に向けて（リーフレット）の作成・配付 ○学力向上実践研究報告書の作成・県教育委員会 Web ページに掲載

推進地区

御所市	○思考力、判断力、表現力を育成する授業スタイルの確立 ○指導主事等外部指導者と連携した研究 ○授業カンファレンスによる授業研究と教材開発 ○推進校における実践研究と研究成果の発信

生駒市

○市内児童生徒の実態や授業の様子の把握
○教育課程研究協議会の開催
○指導主事による学校訪問指導
○推進校における実践研究と研究成果の発信

田原本町

○基本的生活習慣の確立について町広報等での啓発活動
○規範意識の醸成に関する啓発活動及び青少年健全育成推進協議会との連携
○人間関係改善を目指した「体験作文発表会」などの取組
○学校における実践研究と研究成果の発信

研究推進校

御所市立名柄小学校

研究主題

わかる授業からわかり合う授業へ

○「ながらのちから」、県学力診断テストの実施と考察
○授業ビデオカンファレンス
○校内研修の充実
○学びランドの設置

御所市立大正小学校

研究主題

伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの学びをつなげる・広める・深める～

○教員一人一人が個人研究テーマを設定
○学び合う授業づくり
○伝え合う授業づくり
○研究発表会の開催
○各教科の授業において言語活動の充実を図る

生駒市立生駒南第二小学校

研究主題

自ら考え、仲間とともに深め合う子どもをめざして

～算数科を中心として基礎基本を定着させる指導の在り方の研究～

○児童の実態把握（児童一人一人に学力診断を行い、指導に生かす）
○授業力向上に向けた取組
○指導方法の工夫（放課後学びタイム、少人数授業）
○研究発表会の開催
○教材・教具の開発

田原本町立北小学校

研究主題

書く力を高める授業の研究

○地域の教育力の活用
○児童の学習意欲向上への取組
○順序立てて、分かりやすく表現する力の育成
○書くことを効果的に取り入れた横断的な単元の構築

学力向上実践研究　推進地区の取組内容

御所市教育委員会

１．重点課題への取組状況

平成19年度から実施された全国学力・学習状況調査の結果の分析から、学力面では、知識を主としたＡ問題において年々学力は向上してきている。しかし、活用を主としたＢ問題においては、全国、県平均との差が大きく無解答率も高い。また、児童質問紙の結果から、自己を認める、成就感を味わう、将来への展望をもつ等自己を肯定的に捉える意識が低い傾向にある。

上記のような状況と新学習指導要領の趣旨を踏まえながら、本推進地区において

・思考力、判断力、表現力を育成する授業づくり

・思考力、判断力、表現力の評価方法の確立

を重点課題として取り組んだ。

(1) 思考力、判断力、表現力を育成する授業スタイルの確立

①　各校の実態把握による課題の分析

大正小学校　児童の学習規律の定着と学習意欲の向上

教職員の言語活動の捉え、系統性、授業構成等の研究

名柄小学校　読み取る力の向上

思考力、判断力、表現力の評価方法

児童の学習意欲を向上させる指導方法の工夫

②　言語活動の充実を図るための、授業におけるペア・グループ学習の在り方

大正小学校　ペア・グループ学習を基本とした学習形態の在り方

名柄小学校　授業におけるペア・グループ学習の効果的な活用

(2) 指導主事等外部指導者と連携した研究

①　２校共通の外部指導者の招へい

一人一人の児童の考えや思いを引き出す指導法の研究

小畑公志郎（元宝塚市立小学校長）

②　追究課題ごとの多彩な外部指導者の招へい

県・市指導主事

安藤輝次　（奈良教育大学教授）

粕谷貴志　（奈良教育大学准教授）

(3) 授業カンファレンスによる授業研究と教材開発

授業研究　　全員参加　　10回

グループ　　10回

教材・教具の開発、学習環境の充実

多目的ホールを活用した学びランドの設置

(4) 研究成果の発信

大正小学校　　学力向上実践研究　研究発表会を開催

日時　平成23年11月19日（火）

16学級（全学級）授業公開

全体会における研究実践発表

名柄小学校　　平成23年度奈良県学力向上フォーラムにおいて

「自ら学ぶ子どもを育てる授業の創造」をテーマに実践発表

教育委員会　　平成23年度奈良県学力向上フォーラムにおいて

「推進校がつなぎ・広げる学びの創造」をテーマにシンポジウムで報告

２．調査研究の成果及び今後の課題

(1) 研究の成果

①　各推進校における県学力診断テスト等の数量的観点別把握と結果分析

ＰＤＣＡサイクルによる検証も推進校において定着しており、県学力診断テストやアンケート調査等を活用し、数量的観点別把握と結果分析を行い、その改善に取り組んでいる。

まだ数学的思考力では県平均と比較して低い状況にあるが、

・授業では自分の考えを発表する機会が与えられているか

・授業では話し合う活動を行っているか

・人に説明したり文章に書いたりするのは難しいか

では、肯定的に捉えている児童の割合が高くなっている。

またこの取組によって、思考力の分析では、中位層の児童の成長が著しいことが明らかになった。

②　研究発表会、研修会等での発表

研究発表会や学力向上フォーラムでの研究発表、公開授業の後の参加者との意見交換会を通して研究の成果を整理するとともに、取組について多角的な観点からの意見を聴くことができた。

③　ＰＤＣＡサイクルによる検証

検証により課題や改善点が明確になり、学力向上へのより具体的な取組が示されることにより教職員の実践へのモチベーションを高めることにつながった。

(2) 今後の課題

推進校２校が取り組んだ思考力、判断力、表現力を育成する授業づくり、思考力、判断力、表現力の評価方法の確立は、まだ取組を始めたばかりである。今年度の検証をもとにさらに取組を進めていきたい。

また、今後推進校２校の研究の成果を市内の学校に伝達し、御所市全体で学力向上に取り組んでいきたい。

生駒市教育委員会

１．重点課題への取組状況

小学校においては新学習指導要領に基づく学習を確実に実施していくとともに、中学校においては、移行措置期間の最終年度として全面実施に向けた取組の充実及びその先行実施を含めた次年度への準備に取り組んできた。本市としても、主に夏期休業中等を中心に、研修を実施するなど、教員の指導力向上に向け取組を進めてきた。

◎基礎基本の確実な習得を図る指導法の研究
◎知識や情報を活用して、問題解決を図る活動の充実
◎学習に対する意欲を高める手立ての工夫
◎学校全体で取り組む体制づくり
◎学校・家庭・地域が連携する取組の充実
◎各種調査結果を生かした授業改善、指導改善の実施

(1) 市内児童生徒の実態や授業の様子の把握

これまでの全国学力・学習状況調査等の結果を基に、市内児童生徒の学力や学習状況、そこから見られる授業の様子等について、本市の傾向を分析した。

○　学力について

本市は全国学力・学習状況調査の国や県の結果等に比べ概ね良好であるものの、学習意欲や知識・技能の活用等、そこから見られる課題は県のそれと同様の傾向があり、その改善を図る取組の充実は重要課題である。

○　学習状況について

（生活）

・小・中学校ともに朝食は毎日とっているが、中学生の６割以上が夜 12 時以降に寝るなど夜更かし傾向が強い。
・小学生は比較的家族で話をするが、小・中とも家族と一緒に夕食を食べている家庭は少ない。

（行動や考え方）

・自分の将来について考えをもっている児童は比較的多い。
・きまりや友達との約束を守っていると認識している中学生は多いが、小学生は少ない。

（学習時間や学習意識）

・普段や休みの日の家庭での学習時間が長い。通塾率が高く、休みの日に学習塾で長時間学習する児童生徒が多い。
・国語・算数（数学）ともに、大切と思うが好きではない児童生徒が多い。算数（数学）に比べて国語は授業内容がよく分からないと答えている児童生徒が少なくない。

（学校での授業）

・小学生は、普段の授業で考えを発表する機会やグループで話し合う機会が比較的設けられていると感じている傾向があるのに対し、中学生ではその機会が設けられていると感じている生徒は少ない。
・小学生は、言語活動を取り入れた学習や思考・判断・表現を取り入れた学習が行われていると感じている傾向にあるが、中学生で同様に感じている生徒は少ない。

(2) 教育課程研究協議会の実施（H24.2.2）

中学校の教務担当教員等による研究協議会を開催し、新学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施に向けて、各校の教育課程を持ち寄り、その工夫点等を出し合いながら情報交換を行

った。市教育委員会からは、教育課程編成・実施のポイント等を指導するとともに、その評価方法及び指導要録の記載について指導を行った。

(3) 指導主事による学校訪問指導

学校からの要望を基に、県教育委員会指導主事の要請訪問による指導を受けた。また、市教育委員会指導主事が随時校内研修の指導に当たった。

平成 23 年度実施　小学校９校 16 回（国語、算数、書写、体育、道徳　等）
中学校１校　１回（論理的思考やグループ討議と効果的な板書について）

小学校では、教科ごとにほとんどの学校が外部から指導者を招いて授業研究を行っている反面、中学校ではその機会が少ない。今年度、グループ討議の仕方や板書の仕方等、授業の組み立て方の工夫について講師を招へいし、研修をした学校もあった。また、これまでに授業研究週間を設定し、一人１回必ず公開授業を行う研修を実施している学校もあった。参観した教員からは、「よい刺激になった。」「新しい見方ができた。」などの感想も聞かれた。

(4) 推進校における実践研究

生駒南第二小学校が、県の学力向上実践研究推進校の指定を受け、全校体制で研究に取り組んだ。

（研究主題）「自ら考え、仲間とともに深め合う子どもをめざして」
算数科を中心として基礎基本を定着させる指導の在り方の研究

（研究内容）

児童の実態把握　…　全国学力・学習状況調査及び県学力診断テストの結果等の活用
授業研究等による教員の授業力の向上　…　学校独自の学力テストの実施
児童の学力向上を目指す指導体制の工夫　…　少人数指導の実践、「放課後学びタイム」の実施
教材・教具の開発　…　学習内容の系統性を図った算数プリントの作成、デジタル教材の活用

(5) 学力向上実践研究　研究発表会の開催（H24.1.27）

生駒南第二小学校において授業研究等による教員の授業力の向上、少人数指導等の指導体制の工夫、「放課後学びタイム」の実施による基礎基本の充実を主な内容として、取組やその成果を発表する研究発表会を開催。当日は、県内、市内から約 100 名の参加者を得た。

公開授業　「20 よりおおきいかず」（１年２組）、「重さをはかろう」（３年１組）
「順序よく整理して調べよう」（６年２組）、「放課後学びタイム」
研究発表及び研究協議、指導講評
講演　「算数的活動と授業改善」
天理大学人間学部教授　上田喜彦　氏
成果の発信　開催校 Web ページに当日配付資料や研究集録、研究紀要を掲載し研究内容を公表している。

(6) 学力向上のための市費負担講師の配置

○ 伝え合う力育成事業の実施

情報教育専門講師による情報活用能力の育成、外国語指導によるコミュニケーション能力の育成、読書活動推進による読む力の育成や感受性の育成により、児童生徒が自分の思いや考えを様々な手段を使って他の人に伝える力の基礎を培うことをねらいとしている。

・「情報教育専門講師」　２名の講師が全小学校を担当　総合的な学習の時間の中で、情報教育を推進
・「わくわくイングリッシュサポーター」　全小学校第５・６学年に学級当たり年間 11 時間配置
小学校外国語活動の指導の充実
・「学校図書館司書」　全小・中学校へ週１日配置　読書活動の推進、言語活動の充実
図書室の整備、読み聞かせ、ブックトークなどにより、読書量が増加した。
今年度２人から７人に司書を増やし、全小・中学校に配置した。
次年度は、さらに大規模校を対象に配置日数を増加する予定。

○ その他、講師の配置

・「学びのサポーター」　31 名を 19 小中学校等に配置　学力補充の充実
学生サポーターを募集し、主に教科学習の指導補助に当たって

いる。

・「特別支援教育支援員」　22名を16小中学校等に配置　　学力補充の充実、個別指導
通常学級に在籍する発達障害等特別な支援を要する子どもへのサポートを行っている。
次年度は、よりきめ細かな指導を行うため、配置日数を増加する予定。

(7) 各種研修会等の実施

・教員英語研修（H23.7.25～29）95名参加
少人数グループによる英会話レッスン
・外国語活動指導者研修（H23.7.26～29）52名参加
アクティビティ、チャンツ、英語ノートを使った模擬レッスン　等
・情報教育研修（H23.7.26～28）200名参加
Word、Excel、PowerPointの基礎・応用
・地域ぐるみ健全育成協議会保・幼・小・中交流学習会（H23.8.26）380名参加
合同交流発表会（H24.2.4）300名参加
学校・家庭・地域が連携した児童生徒の健全育成を目的に開催

(8) 他市町との学力向上実践の交流

学力向上実践研究推進地区（御所市、田原本町）及び推進校（御所市立大正小学校、名柄小学校、田原本町立北小学校）での学力向上に関する取組についての情報交換

・H23. 8.23　第１回学力向上実践研究推進協議会
・H23.11.29　学力向上実践研究研究発表会（御所市立大正小学校）
・H24. 1.27　学力向上実践研究研究発表会（生駒市立生駒南第二小学校）
・H24. 2. 3　第２回学力向上実践研究推進協議会

２．調査研究の成果及び今後の課題

・今年度、県の研究指定を受け研究指定校を中心に本市として学力向上に取り組んできた。本市ではこれまでからも、少人数によるきめ細やかな指導ができるよう市費講師等を配置している。「学びのサポーター」や「イングリッシュサポーター」などの予算確保に努め、今年度は昨年度に比べ充実した配置を行ってきた結果、各学校で個を大切にした学習ができてきている。次年度は更に充実したものとなるよう支援していきたい。

・新学習指導要領が全面実施となり、学習内容の増加等や指導方法の改善に十分に対応できる指導力の向上が求められている。児童生徒の意欲を引き出す工夫や教材研究の充実などを個人はもちろん、学校体制としてその機会を保障する手立てを講じることが必要である。そのためにも研修組織を工夫し、例えば今回改訂のポイントである「コミュニケーション能力を身に付けるための工夫」を研修のテーマとして、教科の枠を越えた授業研究に取り組むなど、全教職員が参加できる体制で研修を深めることが大切である。それにより、実績の少なかった中学校でも有意義な授業研修に取り組むことができると考える。

・県教育委員会指導主事の派遣を要請し、研修を行っている学校は多くない。今後、研修内容を充実させるためにも、指導主事による専門的な指導を受けながら授業力向上を図っていきたい。また、校内研修に市教育委員会の指導主事ができるだけ参加し、研修の実態把握や研修方法等の指導に努めていきたい。

・今年度、県の研究指定校の生駒南第二小学校では、授業研究等による教員の授業力の向上、少人数指導等の指導体制の工夫、「放課後学びタイム」の実施による基礎基本の充実を主な内容として、全校体制で研究を行い、具体的な数値を示してその成果をまとめ、１月の研究発表会で報告した。また、学校のWebページに研究内容と成果を公表している。研究発表会には、市内全小・

中学校から教員が参加し、研究内容を自校の研修に生かすようにしている。

・新学習指導要領の実施状況を把握するため、県の学習状況調査の結果を基に、児童生徒及び教員に対するアンケート調査内容を検討した。次年度の中学校での全面実施を受けて実施し、その実現状況を把握し、課題を分析するとともに、その改善方法を検討していく。

　特に、中学校で言語活動の充実を図る取組があまりされていない状況にあることや小・中学校ともに教科学習が好きと答える児童生徒の割合が少ないことにポイントを置いて、その改善に取り組んでいきたい。

田原本町教育委員会

１．重点課題への取組状況

・年度当初に掲げた重点課題に対する具体的な取組

(1) 基本的生活習慣の確立についての取組

○　町広報による啓発活動

毎月、発行される町広報に２ヶ月に一度、食育というコーナーを設け、「すくすく子ども食育プラン」と銘打って子どもにとって食がいかに重要かを訴える一方、料理レシピを紹介している。

○　幼稚園においては「おはよう、おやすみ、お手伝い」や小学校では「早寝、早起き、朝ごはん」などのスローガンを掲げ、学校通信、学級通信や学級懇談など、機会のあるごとに園児、児童・生徒或いは保護者に啓発活動を実施している。

○　あいさつ運動の推進

本町では、目指す子ども像として「感謝の心でいきいきあいさつ　心豊かにたくましく生きる子ども」をスローガンに掲げ教育活動を展開した。当然、各園・校においてはこのスローガンの具現化に向けて、日々教育活動が実践されたことはいうまでもない。具体的には、校長先生をはじめ職員が毎日校門で児童生徒を迎え、朝の挨拶を交わす光景がどの学校でも見られ、このことによって子どもたちが積極的に挨拶ができるようになっている。中学校においては、この運動に生徒会役員や地域保護者会の面々が参加し、より大きな運動へと広がりを見せ、成果を上げている。

(2) 規範意識の醸成に関する取組

○　町広報による啓発活動

毎月、発行される町広報に２ヶ月に一度、教育というコーナーを設け、「すこやか」と銘打って、本教育委員会の管轄下にある、生涯学習課内の町青少年健全育成推進協議会事務局が子育てにおける規範意識育成について、400字程度のコメントを掲載している。

○　町青少年健全育成推進協議会の活動は、町長を会長にすえ、町をあげて青少年健全育成に向けて活動する組織である。学校はもとより、町議会議員、教育委員、社会教育委員、自治連合会、地域警察署等、子どもに関わる幅広い層から構成される協議会となっている。数年前に地域中学校の荒れが顕著になった事態を受け、組織強化とより充実した活動が構築され、現在に至っている。

(3) 希薄化している人間関係改善の取組

○　「体験作文発表会」

小・中学生が日頃の生活での体験から学んだこと、感じたことなどを作文にまとめて発表する。発表内容の多くは、「命」「人と人の絆」に関するもので、発表者と観客が一体となって、「命」や「人と人の絆」について深く考える機会となっている。

(4) 学習場面における取組

新学習指導要領では、言語活動の充実が強く求められている。町内の小学校では、それぞ

れ言語能力の育成に向けた取組を進めている。以下、この取組を紹介する。

○　聞く力を伸ばす取組

町内には、大規模校１校、中規模校２校、小規模校２校、計５校の小学校があり、言語能力の育成に向けた取組は、５校全てで行われている。

また、町内に「田原本町お話しの会」というボランティア団体がある。会員数は23名で、五つの小学校や五つの幼稚園を、月２回定期的に訪問して子どもたちに本の読み聞かせの活動をしている。子どもたちは、楽しみにしており、目を輝かせて聞いている。このような地道なボランティア活動が着実に聞く力を伸ばしている。

○　読む力を伸ばす取組

町内の小・中学校では、各校で工夫した読書活動に取り組んでいる。中でも、中学校においては、数年前、荒れが顕著な時期があり、心を落ち着かせた中で一日の学校生活をはじめさせたいとの思いから、全校体制での「朝読書」の取組が始まった。

数年間の継続的な取組の結果で、今では毎朝「朝読書」をし、静かに一日を開始できるようになった。

○　コミュニケーション力の向上を図る取組

町内における大規模校では、第１・２学年、第３・４学年、第５・６学年の組み合わせを「兄弟学年」と位置付け、別学年の教室を訪ねて詩の音読を披露する「異年齢交流活動」に取り組んでいる。きっかけは、友達との関係を築くことができなかったり、うまく自分を表現できない児童が見受けられたりしたことである。取組は、１時間目の前に読書や自主学習を行っている「ゼロタイム」（15分間）を使って実施されている。今年は「命」について考える詩を選び、各教室ごとに練習し、兄弟学年の教室を訪ねて音読した。

児童は、日常的に接触の少ない他学年の児童に向けて音読するため、どうしたらうまく伝えられるか考えながら取り組み、音読を聞く側も、積極的に聞こうとする姿勢が見られるようになった。

２．調査研究の成果及び今後の課題

・成果等の把握と検証の手立て

(1) 学校評価の活用

学校評価については、各校で現在、取組を推進中で、町教育委員会には学年末に報告がある。町教育委員会としての分析については、提出を待って行うこととしている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果分析（平成23年度は奈良県学習状況調査結果による）

【小学校　学習状況調査より】

平成22年度は５小学校中２校の抽出調査結果、平成23年度は１校の抽出調査結果である。

①　朝食を毎日食べていますか。

平成22年度　82.1％　平成23年度　97.0％

②　学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめていますか。

平成22年度　55.0％　平成23年度　72.7％

③　学校のきまりを守っていますか。

平成22年度　19.2%　平成23年度　48.5%

○　上記の結果分析

数値としては、平成23年度になって数値が上昇し、基本的生活習慣や規範意識に好ましい改善がなされたと見えるが、平成22、23年度の抽出校が違うことから、参考とはならない。同じ町内にある小学校でありながら、上記の数値が表すように、基本的生活習慣や規範意識については、学校間格差が大きいことが判明した。

今後は、各学校ごとに詳細な分析を行い、その学校の実態に応じた取組をマネジメントする必要がある。

【中学校　学習状況調査より】

①　朝食を毎日食べていますか。

平成22年度　75.7%　平成23年度　75.0%

②　学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめていますか。

平成22年度　44.3%　平成23年度　47.2%

③　学校のきまりを守っていますか。

平成22年度　25.2%　平成23年度　44.4%

○　上記の結果分析

中学校の調査結果は、同一学校のデータであり、その数値変化をそのまま、生徒たちの変化と捉えることができる。上記の数値を見る限り、地域・学校が連携して共通目標を立て、取り組んだ成果であると分析する。とりわけ③については、学校の生徒指導が正しく機能している結果、大きく好転したと認識している。この結果に満足することなく、今後とも取組の充実を図っていきたい。また、①については、ほぼ横ばい状態で、家庭での生活習慣を改善することの難しさを感じる。

(3)　推進校の研究の結果と課題の把握と検証

推進校である北小学校では以下のような研究主題を設定し、組織的な取組を推進した。

○　「学力を高める授業の研究」

この主題設定の理由となる児童の実態は、平成22年度「全国学力・学習状況調査」の結果から以下のようなものであった。

「書くこと」について、観点別評価での「書く能力」の正答率は約90%と高いが、「400字詰め原稿用紙２～３枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思いますか」という質問に対しては「難しいと思う」「どちらかというと難しいと思う」が77%と全国や奈良県全体より高い数値であった。このことから、書く力はあるものの、書くことが苦手と考えている児童が多いという実態が明らかになった。

※　実施した研修

・１学期　県教育委員会指導主事を招き、校内研修を開催。

内容「新しい学習指導要領における言語活動の充実及び国語科「書くこと」の授業の組み立て方について」

・２学期　県教育委員会指導主事、町教育委員会指導主事を招き、研究授業及び校内研修を開催。

内容「国語科３年　２年生に教えてあげよう　ぼくらの社会見学」

※　実践発表会

・平成24年２月14日（火）奈良県学力向上フォーラムで「書く力を高める授業の研究」として実践発表。また、同フォーラムで開催された、シンポジウムで北小学校長が研究に至った経過や研究の成果を発表する。

※　全校的な取組

・学校だよりで子どもたちから応募した、短作文を掲載し書く意欲を高める。

・学級・学年便りのより一層の充実を図る。

・作文集・詩集の作成を積極的に進める。

・聞き合い・話し合う時間の拡充を図る。

○　推進校の成果と課題

＜成果＞

・到達目標、付けたい力を整理することで、見通しをもって指導できるようになった。

・教員個々の指導を共有することができた。

・児童の書く意欲を高めることができた。

・日記や作文を紹介し合うことで、自己理解・他者理解の場が広がった。

＜課題＞

・他教科等との関連を指導計画に位置付けていくこと。

・体験学習と「書くこと」を結び付けながら自分の考えをもつこと。

・「書くこと」を通して地域や人とのつながりを育てること。

学力向上実践研究　推進校の取組内容

「わかる授業からわかり合う授業へ」

御所市立名柄小学校

○　推進校として実施した研究内容

１．重点課題への取組状況

数年前から、算数科を中心に児童が「わくわく」しながら目を輝かせ、やってみようとする授業を設定している。「ドキドキ」しながら、児童の興味ややる気が持続する授業を展開している。児童自らが「みーつけた！」と気付き、発見のある授業内容である「わかる授業づくり」に取り組んできた。奈良県算数数学診断テスト結果の考察より、「読み取りの力が弱い」という児童の実態が明らかとなり、昨年度から「読み取り」を重視した研修を行ってきた。本年度はさらに一歩進み、児童が答えを出したプロセスを考え、なぜそう考えたのかを表現し伝え合う授業展開を創造してきた。次に主な取組を挙げる。

(1)　「ながらのちから」・県学力診断テストの実施と考察

早期のチェック機能として、児童一人一人の学習のつまずきを把握するために「ながらのちから」というテストを全校実施した。「ながらのちから」は読み取る力の実態把握を目的に国語、算数で実施した。国語は説明的文章で、低学年は時間や事柄の順序・内容、中学年は要約・筆者の書きぶり、高学年は要旨・筆者の見方、考え方を問う問題を選択した。算数は、前年度の既習内容から児童がつまずきがちな文章問題を出題した。国語、算数共に基礎基本に関わる問題を実施することによって、つまずきや習得の様子が見えてきた。

また、県教科等研究会が作成している奈良県学力診断テストを実施することで、観点別に学力到達度を把握し、各学年の過去の結果と比較推移を分析し課題を明らかにした。考察を有効に活用して授業を展開した。

(2)　授業ビデオカンファレンス

児童の実態把握と教員の授業力、授業構成等のチェックを毎学期行った。声の出し方・聞く姿勢・話す姿勢・学習態度・一斉指導の際等の児童の様子を見直す。児童の学びについてつながったところまたは停滞したところ、妨げとなっているところを児童の発言・教員の声かけ、支援やその原因等を探り、全職員の共通理解を図った。１学期のカンファレンスから、「聞く・話す」力についての課題が浮き彫りとなり、まずは学習規律の確立の必要性が見えてきた。

(3)　校内研修の充実

○　授業研究

校内研修において「授業を見る視点を考えよう。」と、授業研究の際どのような視点で授業を見るのかを教員間で意見を出し合い共通理解を図った。また事後討議において

①決して授業の批判だけをしない。可能性の発見につながる意見を出す。
②授業の事実の中から今日の授業で自分は何を学んだかを語る。
③授業を公開した同僚への礼儀として、必ず全員が一言話す。

という姿勢で参加することを確認した。

・提案授業①：第２学年算数「三角形と四角形」（指導助言　椿本剛也指導主事）

ペアでの学習を取り入れ、互いの意見を聞く。またどのようにわかりやすく発表したらよいかを考える活動に重点を置いた。

・提案授業②：第６学年算数「拡大と縮小」（指導助言　椿本剛也指導主事）

ＩＣＴ機器を取り入れ、グループ活動で拡大図を描き「拡大の定義」を自分たち

なりに考えた。図を拡大する際に機器を用いることで、視覚的に理解しやすく、児童の理解の促進が図れた。

○　講師招へい

講師：元御所市立小学校教諭　大木文代先生

１学期のビデオカンファレンスにより出てきた児童の課題「聞く・話す」を中心とした学習規律の確立に向けてどのような取組をしていくかの研修を行った。

２学期に向けて共通理解を図ったこと

「焦らずに待てる教員！」

Step１：（低・中）必要なモノ以外出させない
　　机の上の整理（落とさないよう工夫する）

Step２：えんぴつは休み時間にけずらせる

Step３：誰が話しているのか意識させる
　　みんなが向いたことを確認してから話す（教員も児童も）
　　（中・高）みんなにきいてもらうという意識付け

Step４：静かになるまで待つ
　　余計なことはしゃべらない
　　一斉指示は繰り返さない（児童にリボイスさせる）

Step５：教員が意識して反応する（大げさに）

★授業時間を守るために職員朝会の短縮化に心がける。→連絡黒板の利用

講師：元宝塚市立小学校長　小畑公志郎先生

各学年の授業を参観し、キーパーソンになる児童の指摘、ペア・グループ学習のポイントなどについてアドバイスしていただく。

(4) 日々の授業づくり

○　ペア・グループ学習の活用

児童個人の考えをペアやグループで聞き合うことにより個人の考えをより深めるだけでなく、わからないことを聞き合える学習集団づくりを心がけた。

○　ＩＣＴ機器活用

児童の興味・関心を高める授業づくりの一つとしてＩＣＴ機器を活用するために、簡易型電子黒板ソフトとプロジェクタを導入。それに伴い、計画的にデジタル教科書の活用も進めていけるよう、第２学年に国語のデジタル教科書、第６学年に理科のデジタル教科書を購入した。

(5) 研修週間

１週間に２時間オープン授業時間を設定し、意識して互いの授業を参観し合える環境をつくった。教員間で普段どのような授業を行っているのかチェックし意見交流した。

(6) 学びランドの設置

児童たちが体験を通して、算数科における質的・量的な感覚を豊かにする算数環境づくりとして設置していた「さんすうランド」をリニューアルし、「学びランド」とし算数科だけに限らず、その学びの幅を拡げることにした。例えば、百人一首の上の句と下の句のカードを作り、カルタをするだけでなく裏には現代語訳をつけ、百人一首を知らない児童でも、その意味から上の句と下の句の組み合わせを考えるなど、一通りの使い方だけでなく、児童の自由な発想で何通りかの遊び方を考え出せるものを設置した。この「学びランド」では、同学年の学びやつながりを深めるだけでなく、学年を超えた児童の交流があり、コミュニケーションを図れる場としての役割も果たしている。

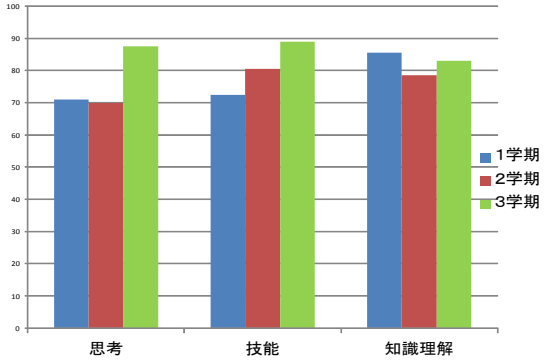
２．調査研究の成果及び今後の課題

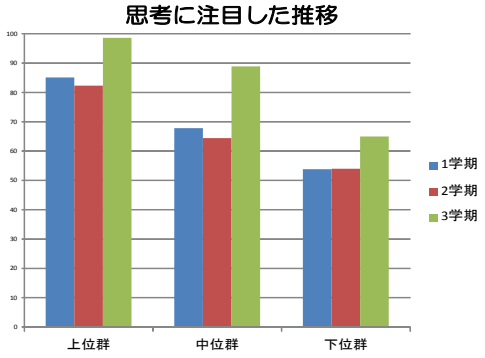
(1) きめ細やかな学力分析と学習形態の工夫

＜成果＞

一人一人のつまずきを踏まえた客観的な数値で児童の実態把握ができた。これまでも、県学力診断テストの数値分析は行ってきたが、「ながらのちから」の実施により、基礎的・基本的なつまずきの実態把握を行うことができた。また、二つ目の成果として、学習活動のポイントで効果的にペア・グループ活動を入れることにより、児童に学力がついてきた。

〈第５学年算数科における数値変化〉





一方的に教える→教えられる関係ではなく、「わからないから尋ねる」「尋ねられたからそれに誠実に答える」という活動の中で確かな学力が身に付き、わかる喜び・わかってもらえる楽しさを体験することで学習意欲や関心を引き出すこともできた。会話が成立していなかったペアも回数を重ねるうちにできるようになり、コミュニケーション能力や児童同士の信頼関係も高めることができた。

＜課題＞

小規模校という点を生かし、さらに一人一人に対応したきめ細やかな学習状況の把握を行い、それに対応した指導の在り方を探っていく必要がある。そのためには、学年が変わり、担任が変わっても児童一人一人の学習状況が把握できる６年間を通した“個人カルテ”の作成を検討するとともに、次年度からの活用を目指していきたい。また、現在は１対１のペアや小集団での学び合いが成立しつつある中、学級集団としての学び合いへどのように拡げていくかということが今後の大きな課題となる。一人一人の学びが保障され身に付いた確かな学力を学級全体で共有できる授業の在り方を探っていかなければならないと考える。

(2) 授業設計の多様化

＜成果＞

ＩＣＴ機器を使用した授業づくりを行い、単なる拡大提示にとどまらず、様々なコンテンツを活用した資料提示により、うつむきがちだった児童の視線を集中させる効果があった。また視覚化されたことで、学級全体で共通理解が図れただけでなく、個個の児童の理解を促進することができた。また提示した資料をカスタマイズすることで、「こうすればいい」「ああすればどうなるのか？」とシミュレーションすることが可能になり、それが学習を深化させ児童同士の学び合いが活発化された場面を多くつくった。

＜課題＞

ＩＣＴ機器の活用についての学習効果は、教員の手応えや児童の反応・つぶやきであるため、数値を伴った客観的な指標ではない。今後は学習効果のデータの把握をしていかなければならない。また、機器の使用が「導入時であるのか」「問題を考えるときなのか」「押さえどころであるのか」など、どの場面で活用するのが最も効果的なのかについてや、「拡大提示のために使うのか」「指示や説明をするためか」「重要ポイントの印象付け」「シミュレーション」「板書代わり」など、どのような扱い方をするのが効果的かについて、計画をしっかりと行わないと機器に頼った授業に陥る危険性がある。また、いかに教員が機器を使いこなせるかというＩＣＴに関する活用力を高める点についても、克服しなければならない課題がある。今後も技術的研修と教材開発を計画的に行っていく必要がある。

「伝え合い、学び合う力を高めよう！」

～子どもの学びをつなげる・広める・深める～

御所市立大正小学校

○ 推進校として実施した研究内容

１．重点課題への取組状況

(1) 本校の重点課題

本校は、長年低学力傾向で、学習に集中しにくい子どもたちの姿があった。奈良県の国語・算数科の学力診断テストや全国学力・学習状況調査の結果より、学習面では基礎学力・読解力が低く、個人差が大きいことや、無解答が多く学習意欲が希薄なことがその一端として示されてきた。また、上記調査の児童質問紙より、基本的な生活習慣が身に付いておらず、規範意識も低いことが明らかになっていた。それらの山積する課題について、職員で話し合ったところ、教員の技量・子どもとの関係づくりを疑問視したり、子どもの生活実態や学習環境を課題に挙げたりする意見が出された。どのようにすれば、目の前の子どもたちに確かな学力を育てることができるのかについて、 講師を招いて話し合う中で見えてきたものが「伝え合い・学び合う力」の育成である。

そこで、昨年度より「伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの読みをつなげる・広める・深める～」を研究テーマに、一人一人の学びを保障するため、国語科を中心に学び合う授業の創造に取り組んできた。具体的には、ペアや少人数のグループで話し合う活動を積極的に取り入れ、個人の考えが変容したり課題の本質に迫ったりすることで思考力・判断力・表現力を高めようとしてきた。その結果、徐々にではあるが授業に取り組む子どもたちの姿勢に変化が見られるようになった。しかし、具体的数値として学力診断の結果が大幅に向上しているとはいえない。学年や項目によって厳しい課題が残る部分も多い。これは、話し合う活動を取り入れることで授業としては成立するようになったが、知識・理解に基づいて思考力・判断力・表現力を深めるような内容まで充実していない点と、授業者によって話合い活動をはじめとする言語活動の捉え方、取り入れ方が違い、系統立っていないためだと考えられる。基礎基本の定着を図りながら、全ての学年・教科等の中で言語活動を充実させることが課題として残った。

今年度は、新学習指導要領にも示されているように、各教科等の授業において言語活動を充実させていくべく取組を進めてきた。特に、国語科においては、「話す・聞く能力」、算数科では「数学的な考え方」、理科では「科学的な思考・表現」、社会科では「社会的な思考・判断・表現」などの各評価規準に焦点を当てた授業づくりを目指してきた。それらを高めるために、学校全体で効果的な授業方法を創造し、各学年・各教科を貫く言語活動（ペア・少人数でのグループでのきき合い）を活用した授業づくりに取り組んできた。

(2) 具体的な取組

① 研究課題の共通認識を図る

「伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの学びをつなげる・広める・深める～」

校内研修で、本年度の研究課題について共通認識を図った。

② 教員一人一人が個人研究テーマの設定

(ｱ) 教員一人一人が１年間をかけて子どもたちとともに目指す授業のねらいを明確にする。

(ｲ) 具体的な手立て

校内授業研究テーマ・個人研究テーマを達成するための具体的な取組や手立てを、３点程度明確に決める。達成された場合は変更していく。

(ｳ) 中間点検、総括

夏休みに中間点検を行い、具体的な手立ての確認・変更を行う。３学期に１年間の取組を総括していく。その際に、１年間、授業で実践してきたことを、実践報告としてまとめていく。

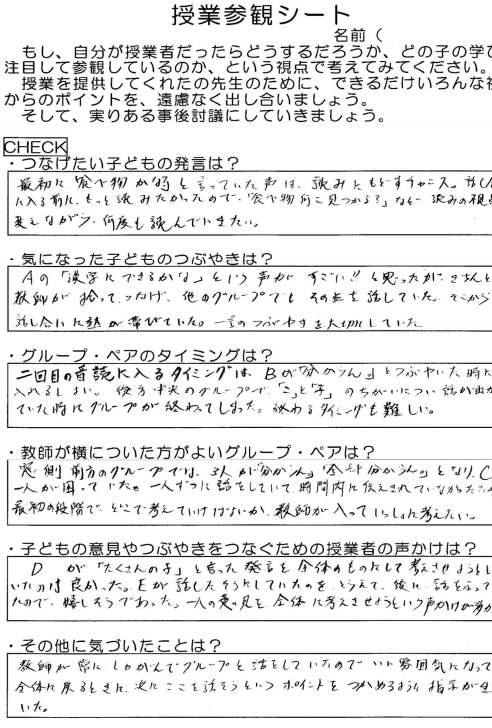
③ 新学習指導要領における「言語活動の充実」について、県教育委員会より山口指導主事を招いて研修を行った。（６月８日）

(3) 積極的に行う校内授業研究→学び合う授業づくり

① 外部指導者（小畑公志郎先生）の指導による学び合う授業づくり

期　日	学年・教科・単元	
５月 19日（木）	国語「ゆうすげ村の小さな旅館」 ３年１組　樅山　敬剛	理科「植物のつくりとはたらき」 ６年１組　岡本　圭司
６月 30日（木）	算数「のこりはいくつ　ちがいはいくつ」 １年１組　上北　友利子	国語「いわたくんちのおばあちゃん」 ５年１組　梶谷　宙志
10月 20日（木）	国語「名前を見てちょうだい」 ２年１組　岡田　哲	国語「ことこ」 ４年　杉本　和仁

・各日、小畑先生に６クラス程度、授業研究とは別に参観いただいた。
・校内授業研究を参観する際に授業参観シートを活用した。
・事後討議は２部会でビデオを視聴しながら意見を交流した。
・事後討議後、小畑先生に参観いただいた学級の指導者と小畑先生との話合いをもった。
・指導案については略案とし、個人研究テーマに対してどのようなアプローチをしていくのか、明記した。
・授業参観シート・振り返りシートの活用
　「もし自分が授業者だったらどうするだろうか」「どの子の学びに注目して参観しているのか」といった視点で参観してもらい、部会の事後討議に生かしている。また、振り返りシートでも、「授業者や学年に向けて」「小畑先生の指導を受けて」「次回までに学級や授業で取り組みたいこと」という観点で振り返ることで、学んだことを自分の取組に生かすための手立てとして活用している。


授業参観シート

名前（　　）

もし、自分が授業者だったらどうするだろうか、どの子の学びに注目して参観しているのか、という視点で考えてみてください。
授業を提供してくれたの先生のために、できるだけいろんな視点からのポイントを、遠慮なく出し合いましょう。
そして、実りある事後討議にしていきましょう。

CHECK

・つなげたい子どもの発言は？
最初に「食べ物が好き」と言っていた声は、読みとも「すごい」。話し合いに入る前に、もっと読みたかったので、「食べ物同じ見つかる」など、読みの視点を変えながら、何度も読んでいきたい。

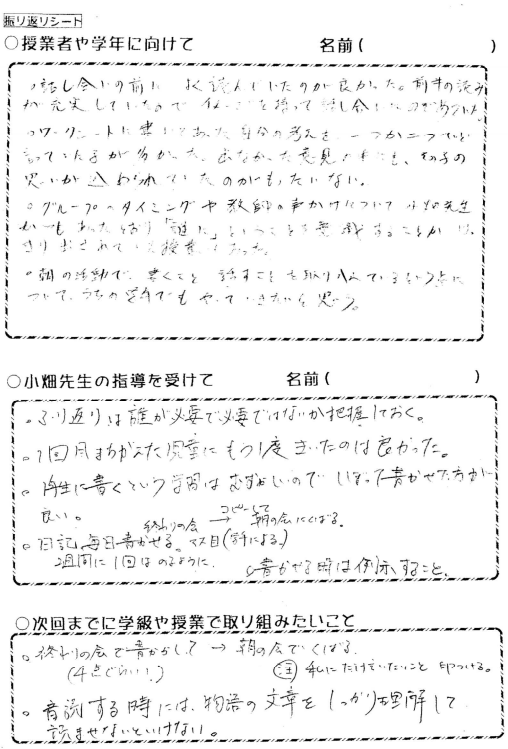
・気になった子どものつぶやきは？
Aの「漢字にできるかな」という声が「すごい!!」と思ったが、さっそく教師が拾ってつなげ、他のグループでもそのまま活動していた。そこから話し合いに熱が帯びていた。一言のつぶやきを大切にしていた。

・グループ・ペアのタイミングは？
二回目の音読に入るタイミングは、Bが「分かった人」とつぶやいた時に入ればよい。後方・東側のグループで、「こ」と「字」のちがいについて話が出かけていた時にグループが終わってしまった。終わるタイミングも難しい。

・教師が横についた方がよいグループ・ペアは？
後側・南方のグループでは、3人が「分かった人」「全部分かった人」となり、Cが一人が困っていた。一人ずつに話をしていて時間内に伝えきれていなかったため、最初の段階で、どこで考えていけばいいか、教師が入っていらっしゃった考えたい。

・子どもの意見やつぶやきをつなぐための授業者の声かけは？
Dが「大くさんの子」と言った発言を全体のものとして考えさせようとしていたのは良かった。Eが話したがっていたのを、どうして、彼に話をふっていたので、嬉しそうであった。一人の意見を全体に考えさせようという声かけが多かった。

・その他に気づいたことは？
教師が常にしゃがんでグループと話をしていたので、いい雰囲気になっていた。全体に戻るときに、次にここを話そうというポイントをつかめるような指示が出されていた。


振り返りシート

○授業者や学年に向けて　　名前（　　）

・話し合いの前に、本読みをしたのが良かった。前半の読みが充実していたので、イメージを持って話し合いに臨めていた。
・ワークシートに書いておいた自分の考えを、一つか二つでも言っていたのが多かった。なかなか意見が出ても、相手の思いが伝わっていたのかもしれない。
・グループのタイミングや教師の声かけについて小畑先生からも「間に」というような意識することが出されていた授業であった。
・朝の活動で、書くこと、話すことを取り入れているという点について、うちの学年でもやっていきたいと思った。

○小畑先生の指導を受けて　　名前（　　）

・振り返りは誰が必要で必要ではないか把握しておく。
・1回目まちがえた児童にもう度言ったのは良かった。
・内容に書くという学習は必ずないので、しっかり書かせた方がよい。
・日記、毎日書かせる。マス目（野球による）
　週間に1回はのるように。
　（メモ）
　・振り返り → コピー → 朝の会にのせる。
　・書かせる時は例示すること。

○次回までに学級や授業で取り組みたいこと

・振り返りの会で書かせて → 朝の会でのせる。
（4点でいい！）　（注）私にだけでいいこと　印がついている。
・音読する時には、物語の文章をしっかり理解して読ませないといけない。

(4) 本校が目指す「伝え合う授業づくり」

①グループ・ペアの学習を組む

一人一人の学びを保障するために、グループ学習やペア学習を活用している。特に、全体の場では意見を出しにくい子の意見を出させるためにグループ学習を取り入れてきた。グループの活動では、一人一人が活動できなかったり、参加できなかったりする子が出ないように配慮し、メンバーの組み方を考えている。

また、グループとして意見や考え方をまとめることではなく、グループの仲間が関わり合うことを通して、個人の考えが変容したり課題の本質に迫ったりすることをねらっている。そのためにも、相手の考えも自分の考えも認め、受け止め合える人間関係づくりも重視している。

分からないことを出し、きき合える関係の上で、友達の疑問を解決しようとする働きかけによってグループのメンバーが言葉を理解していく。一つの疑問を追究し合えるからこそ、理解できたときに「分かった。」という言葉ではなく、次の疑問が口から出ると思われる。このようなグループの経験を積めば積むほど、解決しようと働きかける子どもが増えていく。

②きき合いで子どもをつなぐ

本来、子どもの疑問・課題であれば、学び合う仲間に向かって話され、伝え合い、きき合う活動へと結び付く。子ども同士がつながるためには、課題は子ども自身のものであることが大切である。また、教員が考えさせたい課題であっても、子どもに興味をもたせるように提示することで、子ども同士でつながり、深め合うことができる。

そのために、教員が一人一人の学びをとらえ、疑問や考えをつかみ、引き出していくことが重要である。また、子どもたちのつながりを支えられるように、教員自身がよいきき手になることや、座席の配置や目線、板書や発言のタイミング、本文の再読、言葉にこだわった読みなどへの配慮も、授業づくりの欠かせない要因である。

子どもたちは、全体できき合うことで、それぞれのグループできき合ったことを出し合いながら自分の考えを確かめることができる。似た意見・違う意見など考えたことを全体の場に出すことで、それをきいている友達に新たな視点をもたらすことができる。教員は、支援としてできるだけ子どもの意見をつなぐように心がけ、そのための声かけを意識して授業を行ってきた。

③教員間の学び合いを高める

よりよい学び合える関係を築くには、教員一人一人が個人研究テーマを設定し、年間を通して日々の授業を見直さなければならない。自らの授業を公開する中で、仲間の教員や助言者にアドバイスをもらいながら、実践の反省・検討をしてきた。参観者は、授業者のテーマを踏まえ、子どもの動き、教材の課題、指導の展開等において、授業者が気付かない点を捉えて授業者に返すことを目指し、共に学んでいる。

また、それぞれ課題を抱えた子どもたちが、授業を通して学級の子どもたちとどのように関わり、互いにどのように学び合っていたかを見合うことで、学校にいる全ての子どもへの理解を共有し、授業を通して生徒指導の在り方も学ぶことができる。現在、そのような相互作用を目指し、取り組んでいるところである。

(5) 確かな学力の育成に係る実践的調査研究　－学力向上実践研究－　研究発表会の開催

本校の「伝え合う授業づくり」の具体的な実践を公開することを通して、職員が一体となって取り組んでいる姿勢や子どもたちの学ぶ姿を見ていただくこと、外部からの忌憚のない意見をいただくことでさらに研究を深める糧とする思いをもって、昨年11月29日、研究発表会を県教育委員会・御所市教育委

員会共催で本校において開催した。約100名近くの参観者を得て、２時間の公開授業を設定し、全学級の授業公開（特別支援学級、専科授業も含めて）を行った。授業後には、「授業者と語る会」という形で、授業者が参加者と意見交流を行う。

2. 調査研究の成果及び今後の課題

(1) 奈良県学力診断テスト結果から

表1 県平均との較差（国語）

	０７	０８	０９	１０	１１	前年比
１年					－ 7.9	
２年				−18.9	－ 4.1	+14.8
３年			−10.0	＋ 1.0	−15.9	−16.8
４年		−4.7	+9.5	＋ 7.2	－ 3.0	−10.2
５年	−2.0	−1.3	−12.5	－ 4.6	－ 5.8	－ 1.2
６年	−5.0	−9.8	−10.1	－ 9.0	－ 1.9	＋ 7.1

表2 県平均との較差（算数）

	０７	０８	０９	１０	１１	前年比
１年					＋ 2.4	
２年				−18.1	－ 3.7	+14.4
３年			−10.1	－ 1.4	−13.0	−11.6
４年		−4.6	+1.7	＋ 4.9	－ 6.0	−10.9
５年	+0.8	−3.0	−5.8	－ 6.9	−20.5	−13.7
６年	−6.0	−14.4	−13.9	−19.0	－ 9.3	＋ 9.7

＜考察＞

・　本校では、毎年、学力向上の取組の検証のため、奈良県国語科・算数科学力診断テストを実施し、結果を考察してきた。

　昨年度は「伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの読みをつなげる・広める・深める～」をテーマに、奈良県国語教育研究大会会場校として、国語科に絞った授業づくりを展開した。国語科の診断テスト結果で、前年度より県との較差を縮めた学年が増えているのはその成果であると考える。

・　今年度は、国語科においては、全ての学年で県平均を下回ったが、第２、６学年では前年度との較差を大きく縮めた。一方で第３、４学年で前年度県平均を上回っていたのが、マイナスに転じた。朝のびタイム（業前に行っている基礎学習）でも取り組んできている漢字の読み・書きといったところでは成果は見られる（学年によっては較差が大きいところもあるが）ものの、読むこと、書くことではまだまだ較差がある。

　算数科においても同じようなことが言える。第１学年以外の学年が県平均を下回ったが、第２、６学年は国語と同様に前年度の較差を縮めている。一方で、第３～５学年で較差が逆に広がっている。

表３　県学力診断テスト「数学的な考え方」正答率較差

	数と計算	数量関係	量と測定	図形
１年	8.0	3.7	3.7	
２年		−7.9	−9.1	
３年		−13.0		−19.9
４年	−12.3		−3.8	−6.9
５年	−17.0	−25.6	−24.4	
６年		−15.7	−14.2	

　数学的思考力を問う設問で、第１学年を除いた全ての学年が県平均に比べると正答率が10～20ポイント低い。知識・技能に比べて明らかに思考力が弱いことが分かる。基礎基本の定着も含め、「言語活動」を効果的に活用した教員の授業力向上が今後一層求められる。

・　無解答率について

　国語の診断テストにおいて、無解答率を調査したところ、表４の結果になった。

表4　県学力診断テスト（国語）　　無解答率

	読むこと（説明的文章）	言語事項	書くこと
１・２年	０～５．１％	０～２．６％	１０．３～１２．８％
３・４年	０～１５．９％	０～２９．５％	１５．６～２９．５％
５・６年	０～１２．７％	０～８．９％	１７．８～３２．７％

読むことや言語事項の問題では、無解答率が低くなっている。問題に取り組む際に、しっかり考えて何とか解答を導き出す努力ができるようになっている。一方、

書くことに関しては、無解答率がどの学年でも高かった。今後は、自分なりに考えたことを話合いで伝えるこれまでの取組に加え、書くことなど様々な表現方法を身に付けていけるような取組を考える必要がある。

(2) 指導工夫の改善に関するアンケート結果から

① 「普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられているか」
② 「普段の授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思うか」
③ 「授業で自分の考えを他の人に説明したり、文書で書いたりするのはむずかしい」
※第１～３学年は「授業で自分の考えを説明するのはむずかしい」
④ 「授業中に先生の質問に答えたり、自分の考えや意見を言うのは好きか」

	設問①	
	10月	１月
１年	89.7	91.4
２年	80.9	76.2
３年	85.3	82.5
４年	90.6	87.5
５年	80.3	78.5
６年	70.2	82.3

	設問②	
	10月	１月
１年	92.3	94.3
２年	83.3	81.6
３年	90.7	89.8
４年	94.1	100.0
５年	80.5	73.3
６年	78.9	80.5

	設問③	
	10月	1月
１年	30.5	22.2
２年	64.3	59.5
３年	54.5	56.8
４年	54.8	47.6
５年	88.4	81.4
６年	91.2	72.8

	設問④	
	10月	１月
１年	89.7	91.6
２年	73.8	64.3
３年	63.8	54.5
４年	60.0	80.9
５年	33.3	25.6
６年	33.3	40.0

〈考察〉
設問①については、ほぼ８割～９割の子どもが「自分の考えを発表する機会が与えられている」と答えている。一定の評価ができると捉えたい。設問②については、本校が大切にしている「ペア・グループ学習」「きき合い」に関わる設問であり、高学年がやや低いのが気になるが、ほぼ８割以上が肯定的に捉えている。設問③については、多くの学年で「自分の考えを説明したり、文章に書くことをむずかしい」と思っている子どもがまだまだ多い現状である。設問④については、低学年では「自分の考えや意見を伝えたい」という思いが強く、学年が上がるにつれて、低くなる傾向が見られる。低学年から自分の考えを友達や先生に伝えることの楽しさを体験させるとともに、高学年に進んでも自分の意見を伝えたいという意欲をもたせる工夫がさらに必要である。

○ 成果として

子どもたちについては、数年前に比べて格段に意欲的に授業に取り組む姿勢が多くみられるようになった。自分の考えを友だちに伝えることの楽しさを味わい、もっと聞きたい、伝えたいという意識も徐々に高まってきている。

昨年度までは、国語科に絞って取り組んでいたが、今年度より、様々な教科の中でもきき合う活動を取り入れたことで、自分の考えを伝える機会が増え、自然ときき合う活動に慣れることができた。授業時間が終わっても、互いに気になったところを話したり、教員に感想を伝えたりすることも多くなった。

高学年では、これまでテストでは、あきらめが早く、記述に取り組もうともしなかった子どももいたが、以前に比べ無解答が減りつつある。授業や行事などの感想を書く場面でも、最後の行まで書ききることが当然のことになってきた。

教員については、まず、授業に取り組む姿勢が大きく変わった。一方的に話し続ける授業が減り、教員自身がよいきき手として手本になるように意識してきた。授業の中でグループや全体できき合う時間を確保するように変わり、その結果、子どもたちが考えたり、学び合ったりして活動する時間も増えた。また、きき合いが成立するために必要な課題設定についても、教材研究に真摯に取り組むようになった。教員がきくことを意識し、話すトーンを抑えて語ることも実践されてきた。そして、子どもたちも落ち着いて話し、話す人の方に体を向けてきく姿勢もとれるようになってきた。

教員それぞれが、本校教育目標及び研究テーマを達成するための個人研究テーマを設定したことも有意義であった。個人のテーマを基に学年会で日々の授業について話す機会が増え、きき合いが進められたときの課題を共通理解することができた。教科が違っても子どもたちにとって少し難し

いと思われる課題を効果的に提示することで、より意欲をもってきき合えることも確認できた。
　研究授業でも単なる褒め合いや問題点の指摘になることなく、子どもたちの学習の様子をビデオで確認しながら、教員の発問や子どもをつなぐ声かけ、つぶやきへの対応等について細かく意見を交流できた。授業者が気付いていなかったような子どものつぶやきや書き込みを、参観者から授業者へと伝え返していくことで、以後の取組に生かしていくことができた。このような機会を年間を通して多くとるために、授業案は略案として示し、教員一人が複数回授業を公開できるようにしている。
　今年度開催した「学力向上実践研究発表会」においても、全学級授業公開を行った。教員全員で取り組んできた授業づくりを公開する場とすることができた。また、授業案を検討することで、教員間で様々な教科における課題設定や言語活動の取り入れ方について研修を深めることができた。

○ 今後の課題として

　学び合う授業づくりを通して学校が変わってきたことを実感しつつも、全ての子どもが主体的に参加している授業が毎時間展開されているわけではない。さらに、きき合う内容を深めていくための課題づくり、書くことをはじめとする、話すこと・聞くこと以外の表現についても、教員の指導力を高める必要がある。
　また、今年度、学年を中心に考えてきた授業を、低学年から高学年に系統立て、６年間で学びが向上していくように工夫していくことも必要である。
　奈良県学力診断テストの結果を見ると、県との較差が縮まった学年もあったが、逆に開いた学年も見られた。これは、伝え合い、きき合う授業づくりの実践からようやく子どもたちが落ち着いて学習に取り組める環境が整ってきたものの、その基盤となる教員の授業力を高める必要があることを示している。今後、こうした研修も並行して行っていきたい。

「自ら考え、仲間とともに深め合う子どもをめざして」

～算数科を中心として基礎基本を定着させる指導の在り方の研究～

生駒市立生駒南第二小学校

○推進校として実施した研究内容

１．重点課題への取組状況

(1) 研究主題と研究主題に迫るための方法

自ら考え，仲間とともに深め合う子どもをめざして

―算数科を中心として基礎基本を定着させる指導のあり方の研究―

- **児童の実態把握**
  - 児童一人一人の学力診断を行い、指導に生かす
- **授業力の向上**
  - 授業研究を積み重ね、授業力の向上を目指す
- **指導方法の工夫**
  - 放課後学びタイム
  - 少人数指導（3年生）
- **教材教具の開発**
  - 教材教具の開発工夫
  - デジタル教材の活用

(2) 児童の実態把握

学校独自で2種類の算数テストを 20 年前から作成していることに加えて、県算数数学研究会作成の算数学力診断テストを実施し、下記のように児童の学力の実態を把握している。

- 「復習テスト」･･･新学期当初実施＝前学年の算数科の内容の理解度を把握。
- 「計算テスト」･･･年度末実施＝1年間の学習で身に付いた計算力を把握。
- 「県算数テスト」･･･学年ごとに本校の結果と県の結果（平均点・得点分布・問題別正答率）をグラフ化し比較。（右資料）
- 三つのテストの全校児童の個人成績を集約。
- 結果の中から県テスト 70 点以下、復習テストと計算テスト 80 点以下の児童を抽出。
- 過去の点数と「放課後学びタイム」への参加

年生　算数

得点	1組	2組	人数
0	0	0	0
5	0	0	0
10	0	0	0
15	1	0	1
20	0	0	0
25	0	0	0
30	1	0	1
35	1	0	1
40	0	0	0
45	0	2	2
50	0	0	0
55	1	2	3
60	1	1	2
65	0	2	2
70	0	0	0
75	2	1	3
80	3	1	4
85	2	1	3
90	5	2	7
95	4	4	8
100	4	8	12
計	25	24	49

県テスト比較表

正答	1組	2組	人数
1	24	24	48
2	21	21	42
3	18	18	36
4	18	19	37
5	24	21	45
6	19	18	37
7	20	23	43
8	19	21	40
9	19	19	38
10	22	21	43
11	22	23	45
12	20	19	39
13	22	23	45
14	15	17	32
15	15	16	31
16	14	17	31
17	21	18	39
18	24	20	44
19	21	20	41
20	19	20	39
計	1985	1990	3975
平均	79.4	82.9	81.1

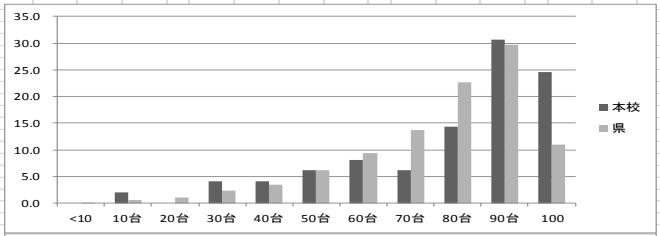
得点分布

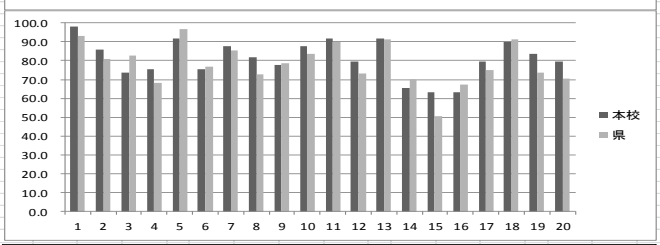
得点	本校	県
<10	0.0	0.1
10台	2.0	0.5
20台	0.0	1.0
30台	4.1	2.3
40台	4.1	3.4
50台	6.1	6.2
60台	8.2	9.4
70台	6.1	13.7
80台	14.3	22.7
90台	30.6	29.7
100	24.5	11.0
計	100	100

年	平均
学校	81.1
県	78.5

問題別正答率

正答	本校	県
1	98.0	93.3
2	85.7	80.8
3	73.5	82.8
4	75.5	68.2
5	91.8	96.6
6	75.5	76.8
7	87.8	85.4
8	81.6	72.8
9	77.6	78.6
10	87.8	83.6
11	91.8	89.8
12	79.6	73.2
13	91.8	91.1
14	65.3	69.9
15	63.3	50.7
16	63.3	67.2
17	79.6	74.8
18	89.8	91.1
19	83.7	73.5
20	79.6	70.5
平均	81.1	78.5





【考察】
本校は、平均点としては県より上回っているが、60点台以下の児童が比較的多く、2極化の傾向がみられる。3～40点以下の児童への指導は大きな課題である。計算力や量の理解にやや弱いようである。

状況を加えて一覧表を作成し、個人の成績の様子や伸びを把握。(右資料)

・ 会議で一覧表を配布し、全職員で共通理解。

・ これらの実態把握をもとに、人権教育推進教員が中心になり、学力低位の児童に対して日々の指導において取り出し指導を行うか、学級への補充で個別指導をするのかを検討し、時間割等を計画し、実施する。

2010年度 算数学力診断テスト等の結果

			2010					2009	2008	2007
名前	児童	学年	学びタイム参加申し込み	算数4月	県算数	県国語	計算3月			
A	1	年	○	75	75		80			
B	2	年	○	32	15	20	65	75		
C	3	年		72	55	35	75	95		
D	4	年	○	80	60	30	80	100		
E	5	年	○	40	30	50	55	85		
F	6	年		72	35	30	75	100		
G	7	年		76	45	20	65	90		
H	8	年		76	55	50	75	100		
I	9	年	○	70	25	25	85			
J	10	年		90	75	85	85	100	100	

(3) 授業力向上に向けた取組

講師を招いての公開授業や学年内での授業公開を行い、授業について研修を深めた。また、授業研究に向けて学年や学年部で授業の工夫について話し合うことで研修を深めた。

また、新学習指導要領の改訂の趣旨や算数科の新しい内容、新学習指導要領で重視される算数的活動について、講師を招いて校内研修会をしたり、教育研修部だよりを読み合ったりして研修を深めた。

○校内授業研究の取組

6月 13 日 6月 22 日	月 水	全体研修 「新学習指導要領」について 講師 県教育委員会事務局学校教育課 椿本 剛也 指導主事 生駒市教育委員会教育指導課 吉村 茂 課長補佐 校内研修 「算数的活動」について 研修だより配布
7月 22 日 8月 29 日	金 月	夏季研修 校内研修 「算数的活動」について 夏季研修 「算数的活動を取り入れた授業の工夫」について 講師 県教委 椿本 剛也 指導主事 市教育指導課 吉村 茂 課長補佐
11 月 16 日 11 月 30 日	水 水	校内研修 公開授業 4年 単元名「面積のはかり方と表し方 『広さを調べよう』」 指導者 島田 浩司 全体研修 公開授業 5年 単元名「四角形と三角形の面積 『面積の求め方を考えよう』」 指導者 八代 大輔 講師 県教委 椿本 剛也 指導主事 市教育指導課 吉村 茂 課長補佐
1 月 27 日	金	平成 23 年度確かな学力の育成に係る実践的調査研究 －学力向上実践研究－研究発表会

校内授業研究 第５学年
単元名 四角形と三角形の面積
「面積の求め方を考えよう」

クリアファイルの発表ボードを使って，台形の面積の求め方を説明しています。

校内授業研究 第４学年
単元名 面積のはかり方と表し方
「広さを調べよう」

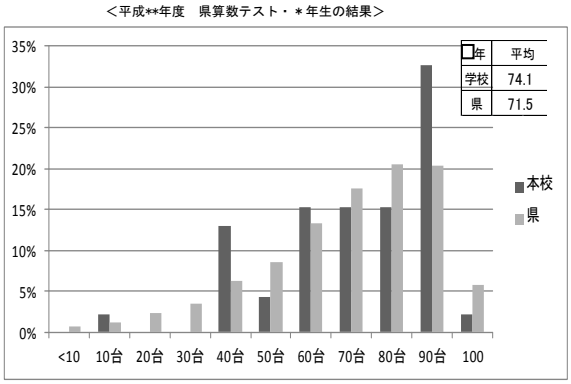
ワークシートを使って，面積の求め方を式や言葉で表しています。

自分で考えた図形の面積の求め方をみんなに説明しています。

(4) 指導方法の工夫の取組

① 放課後学びタイム　第２～６学年

○児童の実態と学力低位改善の手立て



- 学校独自の算数テストと県算数テストの実施の結果、高学年になるに従って学力が二極化する傾向が見られた。
- 子どもたちの生活実態として、就寝時間の遅さや忘れ物などの多さが学習意欲や学習態度の低下として表れており、そのことによる学力低位の児童も何人か見られる。

そこで、学力低位を改善するための手立てとして、学校体制で「放課後学びタイム」を設定し、基礎・基本の学力保障を目指すことにした。

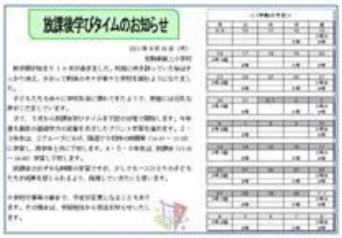
○実施状況

「放課後学びタイム」は平成 21 年度から実施している。初年度は、宿題をしてもよいという学習内容であったので、たくさんの児童が参加した。しかし、参加人数が多すぎて本来の目的である個別指導ができないという反省から、算数科のプリント学習に内容をしぼって実施するようにし、現在に至っている。

学年	参加人数/全児童数	曜日	校時	実施時間帯	実施時間	実施回数(予定)	場所
2年	29/47	月	6校時	14:45～15:30	45 分	10 回 (2 ｸﾞﾙｰﾌﾟ隔週)	少人数室
3年	21/33	金	6校時	14:45～15:30	45 分	10 回 (2 ｸﾞﾙｰﾌﾟ隔週)	少人数室
4年	22/51	火	放課後	15:30～16:00	30 分	20 回	図書室
5年	6/49	木	放課後	15:30～16:00	30 分	20 回	図書室
6年	12/49	金	放課後	15:30～16:00	30 分	20 回	図書室

今年度実施をしている「放課後学びタイム」の概要は、下記のとおりである。

- 学習する内容・・・算数の基礎学力定着のためのプリント学習
- 指導者・・・人権教育推進教員・学力向上推進担当教員・学級担任・スクールボランティア・学びのサポーターなど
- 時間帯・実施回数・・・年間各学年 20 回程度実施予定。第2、3学年は、参加希望者が多く、授業のない6校時目に、2グループに分けて隔週で実施。



1学期の予定お知らせ

学校だよりによるお知らせ

平成23年4月21日

保護者の皆様へ

生駒市立生駒南第二小学校
校 長　井 上 隆 平

放課後学びタイム開始のお知らせ

若葉の新緑も日ごとにさわやかに目にしみるようになりました。保護者の皆様方には，益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。日頃は，本校教育の推進にご協力とご理解をいただきありがとうございます。

さて，本校の重点目標の一つである基礎学力の定着をめざす取り組みとして，放課後学びタイムを平成21年度より開始しました。昨年は，低学年では45分の学習を年間10回，高学年では30分の学習を年間20回実施し，算数科での基礎学力補充に成果を挙げることができました。

本年度も継続して，放課後学びタイムを行います。時間帯については，下記の通り行う予定をしております。5月9日（月）から開始いたしますので，希望される場合は下記の申込用紙に必要事項を記入し，必ず保護者の了解のもとにご参加いただくようご案内申し上げます。

記

1. 学習する内容・・・・**算数の基礎学力定着のためのプリント学習**
2. 指導者・・・・・・・人権教育推進教員１名，学力推進教員１名他　学級担任など

時間帯	月	火	木	金
14:45～15:30	2年			3年
15:30～16:00		4年	5年	6年

3. 学習場所……2・3 年（少人数教室），4・5・6 年（図書室）
4. 下校について
   ・2年生，3年生は，高学年の下校に合わせて帰ります。
   ・4年生，5年生，6年生は，参加者どうしでまとまって帰ります。
5. 実施予定日については，別途参加者に各月の予定表をお渡しします。
   ※　1年生は実施しません。今年度より授業時間数増加に伴い，毎日５時間授業になりました。そのため，学習効果の観点から放課後実施を見合わせ，担任が授業の中で学力補充を図っていきます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・切り取り線・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

申　込　書

○放課後学びタイムに参加します。

年　　組　　児童名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

保護者名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印

住　　所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※参加を希望する児童は，保護者の了解のうえ，4月28日までに担任に提出してください。

（10 回×2） 第1学年は、今年度からの授業時間数増加に伴い実施せず。（p32 の表）

・ 学習場所・・・第2、3学年（少人数教室）第4～6学年（図書室）

・ 下校・・・第2、3学年は高学年の下校時刻（6校時終了後）に合わせて下校。第4～6学年は参加者でまとまって下校。

・ 保護者への理解・・・・「放課後学びタイム」について、年度当初に全家庭に前ページのような案内文を配布し、この事業について理解と協力を求めている。また、実施日について学期ごとに予定表を配布したり、学校便り、学年便りに学びタイムの様子を報告したりして啓発活動を行っている。

○指導方法・内容

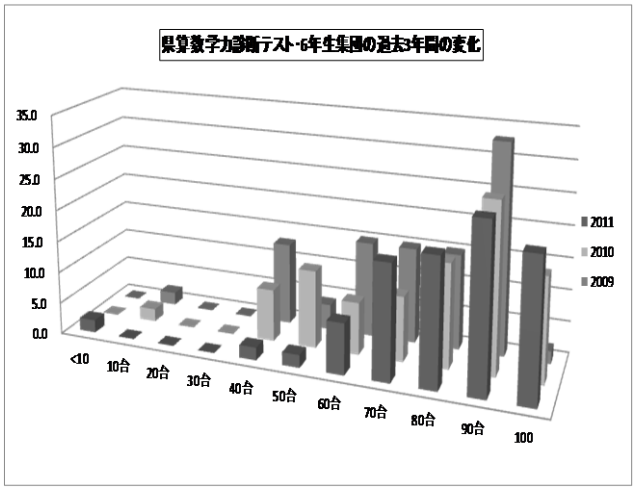
「放課後学びタイム」の学習プリントは、人権教育推進教員が担任と相談しながら、参加児童の実態と算数科の授業内容を考慮し用意している。低学年は 45 分、高学年は 30 分の間に、自分のペースで4枚～10枚程度のプリントに取り組んでいく。学力推進教員がプリントの正誤を確かめ、児童は自分のつまずきの中で分からないことを、机間指導している指導者のアドバイスを受けて理解し、次のプリントに進むという形態をとっている。高学年では、児童2～3人に対して指導者が一人つくことができる体制なので、現在学習している内容の中でも比較的、思考力、判断力をつける文章題を中心に学習を進めている。

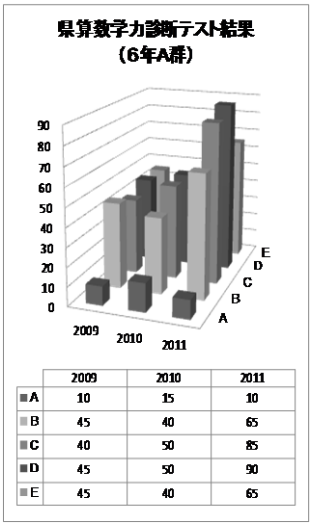
○成果

・ 参加児童の「放課後学びタイム」での学習意欲はとても高く、教室に来てすぐにプリントに取りかかり、たくさんこなそうとする姿が見られる。

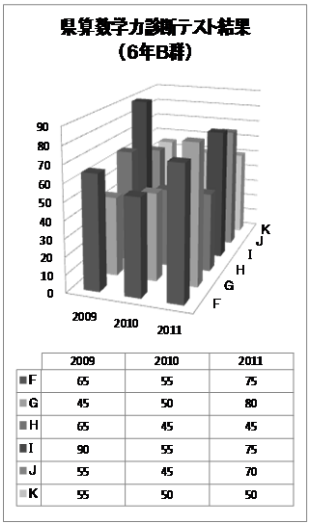
・ 取組の成果として現在の第6学年の過去3年間の県算数テストの結果を見ると、学年が上がるにつれて 50 点台以下の児童が減ってきており、徐々に二極化が解消されつつある。

・ 個々の成績を見ると、学力低位ととらえている児童の中で、学びタイムに参加をしている5人〔A群〕（A～E）のうち、B、C、D、Eは、成績が上がってきている。一方、学びタイムに参加していない6人〔B群〕（F～K）の成績にはあま





	2009	2010	2011
A	10	15	10
B	45	40	65
C	40	50	85
D	45	50	90
E	45	40	65



	2009	2010	2011
F	65	55	75
G	45	50	80
H	65	45	45
I	90	55	75
J	55	45	70
K	55	50	50

り伸びが見られない。これらの成績の伸びは、「放課後学びタイム」の効果であると思われる。

・「放課後学びタイム」において学習効果が上がっている理由として次の四つのポイントが考えられる。

ア　休み時間に残されるのではなく、放課後に残って、みんなが静かに学習する雰囲気がある。

イ　学びタイムの部屋に入ると、「すぐにプリントに取りかかる」「すぐに○を付けてもらう」「すぐにやり直す」「できれば次のプリントをする」という学習サイクルが定着し、即効性のある学習ができている。

ウ　「今学習している単元の復習」「忘れていそうな単元の復習」「これから学習する単元の予習」など、プリントを計画的に提供することで効果的な補充ができ、基礎基本の定着につながっている。

エ　人権教育推進教員や学力推進教員、学びのサポーター等が中心になり、新鮮な雰囲気で声かけをすることで児童の意欲向上につながっている。また、担任が効果的に個別指導できるとともに、客観的に児童の実態を把握し、普段の授業に生かすことができる。

少人数なので，静かに集中できる。

② 少人数指導の取組　第３学年

本校は、第3学年が少人数指導の加配を受けている。指導形態は、算数科中心に教員の特性を生かして少人数担当が前で授業を進め、担任が個別指導を行うT．T方式を取り入れている。児童の実態をよく把握している担任が個別指導に回ることで、一人一人に的確な指導を行うことができ、学力向上につながっている。さらに今年度は、クラスの児童を半分に分け、担任と少人数担当の教師が2教室に分かれて指導するコース別学習に取り組むことにした。

プリントを自分のペースでこなしていく。

○コース別学習の概略

・「たし算とひき算の筆算」「かけ算の筆算」の単元において、「わくわくコース」と「はればれコース」というコース別学習を計画した。

・「わくわくコース」は、プリント学習（B4版）中心に、多くの問題に取り組み、速く正確に計算できるようにするコース。

・「はればれコース」は、絵や図、ブロックなどを使って基礎基本を確認しながら、スモールステップ（B5版のプリント）でじっくり学習するコース。

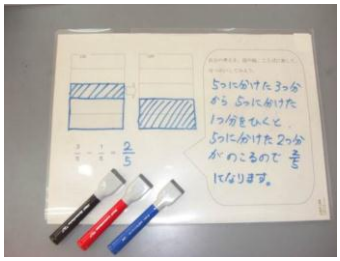
自分で答え合わせをして確かめる。

・コース別学習のよさや学習方法、学習内容を学習の初めに児童に知らせ、自由にコースを選択させた。

・保護者には、学級懇談会での説明や学級通信での紹介、コース選択のプリント等で理解を求めた。その際には、習熟度別指導ではなく、到達目標は同じに設定して、学習方法に差異をもたせ、児童の興味関心によって自由選択するものだということを説明した。

児童はコース別学習を新鮮に受け止め、意欲的に取り組むことができた。学習の速度が速い児童は多くの問題に取り組むことができ、じっくり取り組む児童は自分のペースに合わせて問題をこなすことができ、個に応じた学習を進めることができた。児童へのアンケートでは、「コースに分かれて学習を進めてど

うでしたか。」という質問に対して9割の児童が「よかった。」と答え、「これからもこういうコース別学習の機会があれば、やりたいですか。」という質問に対して、7割近くの児童が「またコース別学習がしたい。」と答えている。



(5) 教材・教具の開発

算数的活動を促すワークシートの作成に取り組むとともに、コンピュータを使っての分かりやすい指導のためにデジタル教材を活用できるようにした。

さらに、自分の考えを発表したり、説明したりするための「クリアファイルの発表ボード」の開発に取り組んだ。「クリアファイルの発表ボード」には次のような学習効果が期待できる。

- クリアファイルの中に白紙をはじめ、マス目や原稿用紙、ワークシートなど自由にプリントを挟み込むことができるので、学習の目的に応じて多様な使い道がある。
- 教科書やワークシートをA3に拡大コピーすることで、教科書やワークシートと同じ数直線や図形、マス目などの上に考えを書くことができるので、正確で分かりやすい説明ができる。
- ホワイトボード用のペンを使用し書き直しができるので、児童は心理的に負担なく考えを書くことができる。
- 赤青黒の3色のペンで多様に書き分けができる。教員が赤色ペンで補足することもできる。
- A3の大きめのサイズなので、ペアやグループでの書き込みが可能である。

2．調査研究の成果及び今後の課題

(1) 学力向上の調査研究における成果

- 児童の実態把握や「放課後学びタイム」など、全職員が共通理解しながら組織的に取り組むことで、学力向上につながる研究を進めることができた。
- 授業研究を初め、新学習指導要領の改訂の趣旨や算数科の新しい内容、算数的活動の具体例など授業力を向上させる研修ができた。
- 学力低位の児童には、少人数指導や「放課後学びタイム」で基礎基本を定着させる指導を進めるとともに、学力の中位から上位の児童には、算数的活動の充実によって思考力、判断力、表現力を高めるよう日々の授業を充実させてきたことは大きな成果であると考える。
- 少人数指導での指導法の工夫とともに、ワークシートの工夫や「クリアファイルの発表ボード」の開発など、自分の考えを深めたり、説明したりするための教材・教具を開発した。

(2) 今後の課題

- まだまだ支援を必要とする児童が見られるので、引き続き算数科を中心として基礎基本を定着させる指導の在り方を研究していくとともに、授業研究を中心に、教員の授業力を高めていく必要があると考える。
- 算数テスト等を通して、児童の実態把握を続け、担任と人権教育推進教員や特別支援コーディネーターとが連携しながら、日々の児童のつまずきに対してどのように効果的に支援をしていくか、個別指導や「放課後学びタイム」の在り方を研究していきたい。
- 学力補充が必要と思われるのに「放課後学びタイム」に参加できていない児童の参加を促すことや、学力低位の児童と生活習慣との関連を探り、家庭の理解や協力をどのように深め連携していくかが今後の課題であると考える。

「書く力を高める授業の研究」

田原本町立北小学校

○　推進校として実施した研究内容

１．重点課題への取組状況

研究課題	平成23年度の重点課題
これまで地域の人材を活用し、体験的な学習を位置付けてきている。今後さらに、教科等を横断的に関連付けながら子どもたちに、「生きて働く力」を身に付けさせたい。	・基礎・基本の定着を図り、知識･技能の活用を目指す。 ・「考えること」を大事にし、根気強く取り組む習慣を身につけさせる。 ・自尊感情を育むよう取り組む。

(1) 本校の実態把握

① 地域の教育力に支えられて

下学年から地域に出かけたり、地域の人材を招いたりして体験学習に取り組んできている。弥生の里を生かした体験学習【曲玉づくり・土器焼き・田植え・稲刈り・菜の花プロジェクト《菜種を植えて菜種油を採取》、萩原農園見学（メロン・スイカの品種改良）･･･】など、地域の人材に体験学習を支えてもらっている。

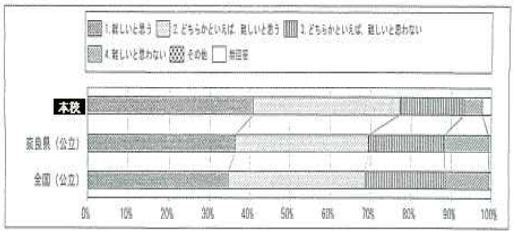
② 児童の学習への意欲

これまでの全国学力・学習状況調査の結果を見てみると、子どもたちは、国語・算数 の「知識」「活用」共に県や全国と比較して大きく下回ることはなかった。また、国語の観点別の評価を見てみると、書く能力の正答率は90.5％(2010年調べ)と高い。しかし、質問紙調査では、「書くこと」を難しいと捉えている子どもたちが75％を超え全国や県の割合を上回っている。

このことから、子どもたちは、書く能力はあるものの「書くこと」への意欲や自信が十分に育っていないと考えられる。

400字づめ原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思いますか。

質問番号	質問事項									
(50)	400字づめ原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思いますか									
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	無回答
本校	40.9	36.4	15.9	4.5					0.0	2.3
奈良県（公立）	36.4	33.1	18.7	11.0					0.1	0.6
全国（公立）	34.6	34.1	19.7	11.0					0.0	0.6



(2) 研修目標の設定

2011年度　　確かな学力を培う学習の創造 書く力を高めるための授業の研究

○　授業改善に向けての研修（県教育委員会　指導主事を迎えて）

・　書く力を高めるために

「考えること」を大事にし、根気強く取り組む習慣を身につける。

【順序立てて、分かりやすく表現する力の育成】

・　到達目標とつけたい力の設定　（ブロック研修で）

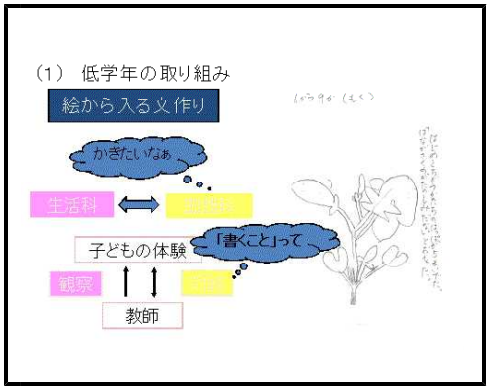
子どもたちが、「書くことは楽しい。書くことで自分の考えを伝え合うことができる。」という経験を重ねることで、「またやってみたい。」という意欲が高まり自信へとつながっていく。そこで、学年ごとの到達目標と「つけたい力」を明らかにしていった。

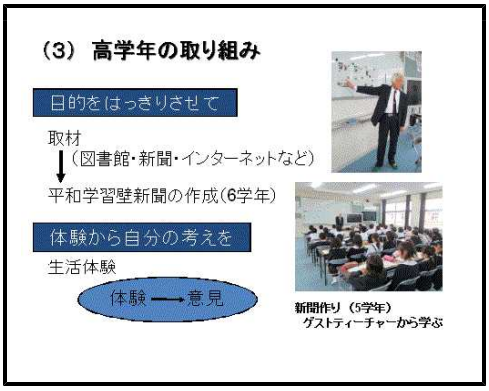
	学年	到達目標	つけたい力
低学年	1	順序を整理して、簡単な構成を考えて文章が書ける。	時間の経過に沿って経験したことを書くことができる。
	2		経験したことを整理し、簡単な構成を考えて書くことができる。
中学年	3	相手や目的を意識し、段落相互の関係に注意して文章が書ける。	段落のまとまりを意識して書くことができる。
	4		適切な接続詞を使い、段落と段落の続き方を考えて書くことができる。
高学年	5	相手や目的を意識し、文章全体の構成を考えて文章が書ける。	・段落をはっきりさせ、段落相互の関係が分かるように構成を考えることができる。 ・事象と感想、意見についてふさわしい書き方をすることができる。
	6		・目的や意図を考えて、語句の選び方などを考えて書くことができる。 ・表現の効果を工夫して書くことができる。

(3) 学年の取組

授業改善に向けて、ブロック研修（低・中・高学年部会）で意見交流を行い、次の三つを大事にしながら、授業を組み立てていった。

○ つけたい力は明確になっているか？
○ どのような言語活動を設定していくか？
○ 他教科との関連は？





(4) 授業研究の取組（県教育委員会　指導主事を迎えて）

授業改善に向けて、子どもたちが、「楽しい・分かった・見通せる・またやりたい・・。」という授業にするために、書くことを効果的に取り入れた横断的な単元を構築する取組を進めた。

―――――― 授業の様子 ――――――

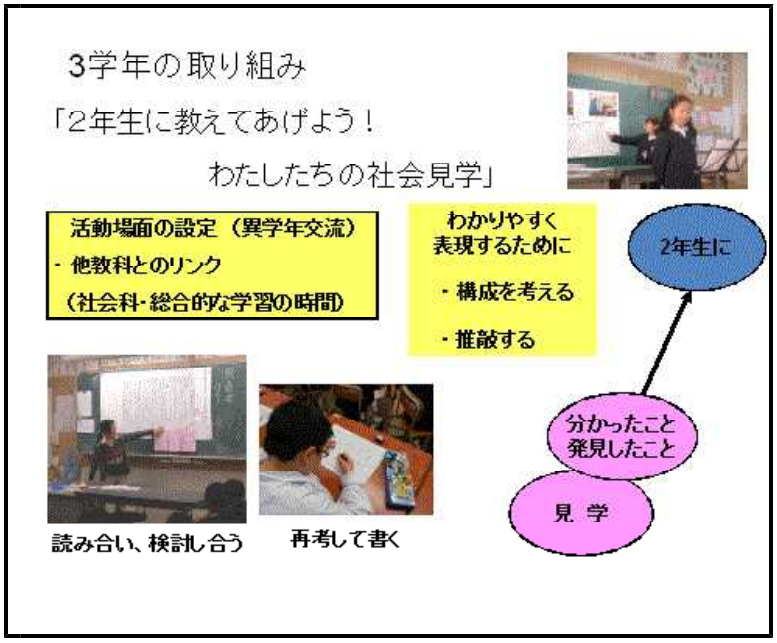
○ 国語科でつける力

新学習指導要領の書くこと・読むことに示された「交流」を大事にした授業計画を立案した。３年生の子どもたちが、地域の農場で見学し体験したことを作文にまとめ、グループやクラス全体で相互評価をして推敲した。自分の考えと他の人の考えを比べたり、もう一度調べ直したりして自分の考えを整理し、より相手に伝わるように書き進めていった。

○ 図画工作で興味を広げる

自分が作文に書いたことを工作で表現した。

ダンボールを切ったり、色をつけたり、楽しみながら大きなトラクターをつくり上げた。



○ 社会科で学習を深める

社会科で「くらしをささえる人びと」を学習する中で、自分たちの地域にも野菜や果物の品種改良を研究している人たちがいることに気付いていった。

○ 異学年（第２学年）の児童に、書き上げた作文を基に模造紙にまとめたものや図画工作で作った道具を使って、体験学習で学んだことを伝えた。相手意識が明確になり、第２学年の児童にも内容がよく伝わる発表会となった。

２．調査研究の成果及び今後の課題

全体研修で授業改善と研修の充実を確認し、ブロック研修で具体的な学年の取組の点検をしてきた。

＜成果＞

・到達目標、つけたい力を整理することで、子どもの実態を確認しながら見通しをもって指導できるようになった。
・教員個々の実践を共有できるようになった。
・児童の書く意欲が高まったり、書く量が増えたりした。また、自分の考えを入れた文章を書けるようになった。
・交流（相互評価）を行うことで、自己理解・他者理解の場が広がった。

＜課題＞

・他教科等との関連を指導計画に位置付け、定着させたい。
・自分の考えを深めさせるための手立てについて、研修する必要がある。
・学力調査等で、具体的に児童の変容を確認していきたい。

平成23年度学力向上実践研究推進協議会委員名簿

	所　　属	職	氏　　名
1	奈良教育大学	教　授	重松　敬一
2	御所市教育委員会	課　長	森本　弥寿則
3	生駒市教育委員会	課長補佐	吉村　茂
4	田原本町教育委員会	指導主事	安田　修三
5	御所市立名柄小学校	校　長	秋元　直樹
6	御所市立大正小学校	校　長	中村　廣幸
7	生駒市立生駒南第二小学校	校　長	井上　隆平
8	田原本町立北小学校	校　長	谷口　廣行
9	県教育委員会事務局学校教育課	課　長	松尾　孝司

事務局

1	県教育委員会事務局学校教育課	係　長	松本　哲志
2	県教育委員会事務局学校教育課	指導主事	東畠　智子
3	県教育委員会事務局学校教育課	指導主事	椿本　剛也
4	県教育委員会事務局学校教育課	指導主事	阪口　信哉